

○極東國際軍事裁判速記錄第九號附錄

昭和二十二年六月四日(火曜日)
東京高等法院内極東國際軍事裁判所法廷ニ於テ

キーンン檢察官陳述

極東國際軍事裁判所裁判長並ニ裁判官殿此ノ名譽アル裁判所ヲ創設シ並ニ同様本裁判ニ參加シ居ル國々ニ依ル檢察官ノ任命ヲ規定スル條例ニ基キ私ハ主席檢察官トシテ我々ノ訴訟進行ノ基礎タル法理論ノ概要及此ノ裁判所ニ今出席シ居各被告方起訴狀中ニ起訴サレテ居ル所ノ罪ニ對シ有罪デアリテ立置セントスル事實ヲ陳述スル責任ヲ持ツテ居リマス。

是ハ確カニ多分歴史上重要ナル裁判ノ一ツデアリマセウ。地球上ノ人口ノ大半ヲ包含スル諸國ノ組織アル政府ヲ構成シテキル此處ニ代表者ヲ送レル一ヶ國ニテリ重要デアリマス。ソレハ其ノ他凡テノ國々ニモ、亦各國ノ使節ノ人々ニテリ重要デアリマス。何トナレバ此ノ裁判ハ世界ノ平和ト安全ニ遠大ナル效果ヲ齎ラス事ヲ得ルカラデアリマス。

本訴訟手續ヲ開始スルニ當リ先ヅ本訴追ヲ指導スル人々ガ其ノ目的ヲ明白ニスル必要ガアリマス。我々ノ概括的ノ目的ハ正義ノ正シキ執行デアリマス。而シテ我々ノ特定のナ意圖ハ我々ガ正當ニ成シ得ル一切ヲ戰爭ノ慘害防止ノ目的ニ寄與サセントスルニアリマス。

裁判長閣下、是ハ普通一般ノ裁判デアリマセウ。何故ナラバ我々ハ現ニニコ、デ全世界ヲ破壊カラ救フ爲ニ文明ノ斷乎タル戰爭ノ一部ヲ開始シテ居ルカラデアリマス。此ノ破壊ノ脅威ハ自然力カラ來ルノデハナクシテ支配ニ對スル無謀ナ野心ヲ以テ此ノ世界ニ時ナラズ破壊ヲ進シテ持チ來タス人々ノ入念ニ計畫サレテ努力カラ齎ラサレルノデアリマス。是ハ強イ陳述デア

リマスガ然シナガラ本事實ニ關シテハモット温和ナ言葉ヲ以テソレヲ表現スル事ハ出來ナイノデス。

世界ヲ通ジテ被告ヲ含ム極東少數ノ人間ガ私刑ヲ加ヘ自己ノ個人ノ意志ヲ人類ニ押しツケントシタノデシタ。彼等ハ文明ニ對シ宣戰ヲ布告シマシタ。彼等ハ法則ヲ作りソシテ爭點ヲ裁決シマシタ。彼等ハ民主主義ト其ノ本質的基礎即チ人格ノ自由ト尊重ヲ破壞セント決意シマシタ。彼等ハ人民ニ依ル人民ノ爲ノ人民ノ政治ハ根絶サルベキデ彼等ノ所謂「新秩序」ガ確立サルベキダト決意シマシタ。ソシテ此ノ目的ノ爲ニ彼等ハ「ヒトラー」ニ派手ヲ握リマシタ。彼等ハソレヲ條約ノ形式デヤツタノデス。ソシテ此ノ同盟ヲ誇リシマシタ。共ニ彼等ハ起訴狀ニ列學サレテ居ル偉大ナル民主主義諸國ニ對シ侵略的戰爭ヲ計畫シ準備シ且ツ開始シタノデシタ。

彼等ハ進んで人間ノ動産及ビ無價物ヲシテ取扱ヒマシタ。此ノ事ガ殺戮ト幾百萬ノ人々ノ征服及ビ奴隸化ノ意味スルト云フ事ハ彼等ニ何ラ重要デアハナカッタノデアリマス。又此ノ事ガ老幼ノ世界ノ到ル所ニ於ケル殺戮ノ目的トスル計畫或ハ企圖ヲ含ンデ居ラウ事ハ彼等ニ取り全ク無關心事デアリマシタ。此ノ事ガ日本ヲ含ム世界ノ花トモ云フベキ若人ノ時ナラズ最後ヲ齎スニ違ヒナイト云フ事ハ全ク要點ヲ外レテ居ル問題デアハナカッタノデシタ。條約、協定及ビ保障ハ彼等ノ心ノ中デアハ單ナル言葉ニ紙片——トシテ扱ハレタノデシタ。從ツテ彼等ノ努力ノ上ニ何等阻止的影響ヲ作ラナカッタノデシタ。彼等ノ目的ハ世界中ニ武力ガ放たレルベキダト云フ事デアリマス。彼等ハ武力ト支配ヲ物ヲ考ヘ正義ノ目的ヲ全ク喪失シマシタ。此ノ企テニ於テハ何百萬ト云フ人々ガ死ニ得タデセウ。諸國家ノ資源ハ破壊サレ得タデセウ。斯

ル事ハ全テ(彼等ノ)東亞延イテハ悉ニ全世界ノ支配及統御ヲ目的トスル彼等ノ狂氣ジミタ企圖ニ於テハ何等重要デアナカッタノデアリマス。其ノ支配及統御ガ彼等ノ共同謀議ノ趣意デアツタノデアリマス。ソレデ我々ハ茲ニ次ノ如キ問題ニ直面スルノデアリマス。即チ其ノ存在ノ危局ニ直面シテ居ル事ヲ今日嚴シク想起サセラレテ居ル文明ハ今斯ル行動ヲ防止セント試ミル事ナク袖手傍觀シテ是等ノ暴行ヲ放任スルコトヲ餘儀ナクセラレナケレバナラナイデセウカ。

我々ノ時代ニ於ケル戰爭ガ昔ノ戰爭トハ全ク異ルト云フ事ヲ理解スルノハ譯ノナイ事デアリマス。今日ソシテ更ニ遙ニ一層重大ナルハ明日及ビ今後永久ニ互ツテコトデアアルガ戰爭ハ全體戰爭以外ノモノデアハリ得ナイノデアリマス。今日及ビ明日ニ於テハ凡テノ戰爭ハ空界ト領土ニ境界ガアリマセウ。若者モ老人モ武裝セル者モ武裝セル者モ犠牲トナリ家ハト云ヘバ大都市ニアルモノカラ小サナ村ニアルモノニ至ル迄破壊カラ免レル事ハ出來マセウ。將來ノ戰爭ハ其ノ文字通りノ意味ニ於テ文明ノ存在ノミナラズ又生キトシ生ケルモノノ存在ヲ脅カスモノデアアル事ヲ述ベルノハ是ヲ茲ニ繰返セバ陳腐ニ思ハレル程今ヤ餘リニ明白ナ事實ニナツテ居ルノデアリマス。人類ノ願望トシテ存續シテ來タ此ノ平和ノ問題ハ今ヤ十字路ニ達シテ居ルノデアリマス。何故ナラバ我々ガ既ニ承知シテ居ル破壊ノ道具ハ其ノ發達ノ初期ニアルカモ知レヌモノニ於テサハモ最高度ノ發達ヲ遂ゲタ人間ノ想像力ノミガ其ノ現實ノ事態ニ對處スルニ適スル底ノモノトナツテ居ルノデアリマス。此ノ十字路ニ於ケル我々ノ疑問ハ今ヤ文字通り一個ノ解答トナツテ居ルノデアリマシテ即チソレハ「水ヲアベキヤ水ハザルベキヤ」ト云フ事ナノデアリマス。

此ノ問題ニ對スル解答ハ無限ノ忍耐ト寛大サヲ必要トシ又諒解ト一致ニ到達スル爲メ非常ニ熱心ナル試ミヲ必要トシマス。我々ニ關係アルノハ此ノ問題ノ一部分ニ就テニ過クナイノデアリマス。此ノ法廷ニ於テ我々ニ賦與シテ居ル眼ヲ以テ正當ナ且ツ結果ノ方法デ將來ノ戰爭ヲ防止スル爲メ我々ハ如何ナル事ヲ爲シ得ルデアリマセウカ。

我々ノ目的トスル所ハ豫防或ハ阻止デアリマス。ソレハ報復トカ復讐トカ謂フ些細ナル取ルニモ足ラズ目的トハ何等關スル所ガアリマセウ。然シナガラ本審理中ニ於テ我々ノ切ニ望ンデ居ル所ハ人類ニ是等ノ苦シミヲ持チ來ス者ヲ普通ノ重罪犯人トシテ烙印ヲ捺シ且ツソレニ從ツテ處罰スル事ガ將來懲罰ニ屬スル者ガ出テ來タ場合其ノ侵略的好戰的行動ヲ制止スル效果ヲ有スル事ガアリ得ナイ事デモナク又考ヘ得ラレナイコトデモナイト云フコトデアリマス。

ソレ故本裁判ニ於ケル我々ノ特ニ目指シテ居ル目的ハ一國ニ屬スル個人ニシテ公ノ地位其ノ他ニ於テ侵略的戰爭ヲ而モ特ニ自國ノ健全ナル條約、保障及ビ協定ニ違背シテ長期的戰爭ヲ計畫スル者共ハ普通ノ重罪犯人デアリ且ツ國々ニ於テ多年ニ互ツテ殺人者、土匪、海賊及ビ掠奪者ニ對シテ課シテ來タ刑罰ニ値シ又之ヲ受タルデアラウト云フ既ニ公認セラレテ居ル法則ヲ確認スルニアルノデアリマス。

殺戮ハ正義又ハ法律トハ斷ジテ相容レナイモノデアツタト云フ事ヲ我々ハ主張シマス。百萬ノ生命ヲ破壊シ計畫シ之ヲ起スコトモ唯一人ノ殺害ヲ計畫シ之ヲ起スコトモ同様不法行爲デアルト云フ事ヲ我々ハ此處ニ主張シマス。我々ハ更ニ國家ノ法律及ビ制度ヲ支持スルトノ誓言ハ刑罰ノ免除ヲ生ミ出スモノデアナイ事ヲ主張シマス。又百萬ノ生命ガ奪ハレタ戰爭ヲ「事件」又ハ「捕縛の出來事」ナリト敘スル工夫、斯カル個人ガ解釋シテ居ルヤ、ニ戰爭ハ國家の大望ノ促進トシテ正當化サレル、云フ要求モ同様デアリマス。日本政府ヲ制御シ其ノ行動ヲ左右シテ居タ是等被告入達ニ依リ日本國家ガ正當ナル諸法律及ビ諸義務ニ違背シタ事ヲ裁判所ヘ證

據トシテ提出陳示シテ事實ト狀況ガ示スコトヲ
 我々ハ確言致シマス。
 是等被告及ビ被告ノ各々ガ、彼等ガ計畫シ準
 備シテ、アツタ且ツ開始シ遂行シテ戰爭ガ當ニ
 戰場ニ於ケルバカリデナク家庭、病院、孤兒院、
 或ハ工場、農場ニ於ケル大規模ナ人命破壞以外
 ノ何モノヲモ結果シ得ザルコト、及ビ戰爭ノ犠
 牲ハ老若、健弱、男女並ニ幼兒ニ差別ナク及ブ
 だらウ事ヲ充分承知シテキタ事ヲ更ニ示シマセ
 ヲ。

過去多年間、冷靜ナ忍耐強イ且ツ平和ナ者達
 ハ何故ニ國々高キ地位ニアル運命者、之等ノ國
 際的悲劇ヲ惹起スル運命者ガ罰セラレズニ居ル
 ソカ其ノ理由ノ探求ニ困却シテ居リマシタ。彼
 等ニトツテ斯ル指導者達ニハ正義ノ實際的支配
 ハ及バズト結論スル國際法原則ノ提案者ノ論理
 ヲ推測シ理解スルノハ難シイコトデアリマス。
 戰場ニ於ケル十代ノ青年達ノ合法的生命破壞ハ
 許スガ然シ平和ノ敵敵ニ彼等ニ時ヲナラヌ最後ノ
 止メヲ齎ス破壊ノ原罪ノ實際ノ創案者、計畫
 者、開始者又設計者テアル外國ノ戰爭王等支配
 者達ヲ正義ニ訴ヘルコトノ正當性ヲ否定スルト
 云フ先例ト論理ト體系即チ正義ノ概念ヲ理解ス
 ルニ困却シテ居リマシタ。

裁判長閣下、私ハ茲ニ南京、眞珠灣、香港、
 「ヒリッピン」、「グダラルカナル」、硫黃島、沖繩、
 「マリイ」、「グダラルカナル」及ビ世界ノ其ノ他
 ノ地ニ於テ春秋ニ富メル多數ノ青年ノ流血ヲ見
 タ事ニ本法廷ノ御注意ヲ引クニ當リ何等ノ煽動
 的目的ヲ存シテ居ナイデアリマス。中華民國
 及ビ亞細亞ノ其ノ他ノ地ニ於テ殘酷ナ非人道的
 暴力ガ恣ニシメラレタデアリマス。是ハ皆
 一大模型ノ一部デアツテ其ノ邪惡ハ世界中ノ無
 事、無力ナ個人ノ生命ニ對シ全クノ輕蔑ヲ表シ
 タモノニアリマス。シテ「ヒリッピン」ニハ傷ミ難
 イ捕虜デアリマス。若シ文明ヲ侮辱ノ緣ニ追ヒ
 ヤツタ個人ノ處罰ニ對シ何等ノ正當視サルベキ
 理由ガナイナラバ正義其ノモノガ可笑ヒモノデ
 アリマス。

又合法性ニ異議ヲ申出デテ居リマスガ我々ハ此
 ノ異議ハ總テノ文明ノ破壞ヲ防止スル爲メ有效
 ナル手段ヲ講ズル文明國ノ能力ニ對スル明カナ
 挑戰ヲ構成スルモノデアルト主張スルモノデア
 リマス。何故ナラバ爾等諸君ニ見レバ結局被告
 ハ假令彼等ガ計畫又ハ共同謀議ニ參加シ又ハ宣
 戰ノ布告セラレ若クハ布告セラレザリシ此ノ侵
 略戰爭又ハ國際法、條約及ビ保證ニ違反セル戰
 争ヲ惹起スベク彼等自身ノ中デ又ハ彼等自身
 デ行動シタト云フ事ガ充分證明セラレタトシテ
 モ、現在此ノ世ニハ彼等ヲ裁判スル正當權限ア
 ル何等ノ權力モ存在シナイ、又是等被告ヲ處
 罰スル一而モ峻嚴ニ處罰スル何等ノ公正若ク
 ハ合法的權利モ存在シナイト彼等ハ主張シテ居
 ルデアリマス。

現在「ニコレムベルグ」ニ於テ、被告席ニ居
 ル被告コソ異レ、同様大訴訟手續ガ行ハレテ居
 リマスガ、ソレ等ニ付テハ我々ハ何等關心ヲ持
 チマセン。唯當裁判所ニ對シ被告等ハ「ニコレ
 ムベルグ」ニ於ケル被告ト其ノ意圖ヲ同ジシレ
 フコトヲ指摘シナイニデデアリマス。シテ見レ
 バ若シ我々ノ見解ガ正當ヲ得テ居ルトスレバ其
 ノ文字通りノ意味ニ於テ一ツノ重大ナル決定ガ
 ナサレラケレバナラナイデアリ、而モ此ノ決
 定ハ恐ラク人間生活ノ存續カ終熄カヲ決スルデ
 アリマセウ。

若シ此ノ事ガ眞實デアラバ苟モ思慮アル
 人デアラナラバ誇張ノ言トハ信ジナイコトト思
 ヒマスガ我々ハ實ニ新シイ而モ戰慄スベキ程危
 急ナ時代ニ在ルデアリマス。行動ノ爲ニハ徹
 密ニシテ確立セル先例ガ必要トスル人々ニ對
 シテハ我々ハ此ノ我々ノ見解ハ決シテ新奇ナ考
 へ方デハナイト云フコトヲ指摘シタイト思ヒマ
 ス。有史以前及ビ原始時代ヨリ中世期ヲ通ジ現
 代ニ至ル迄侵略戰爭ノ發行者ヲ處罰スル爲ニハ
 何等カノ方法ガ常ニアツタデアリマス。

此ノ國際司法裁判所ヲ設置シ、被上ノ戰爭犯
 罪者ニ自己ヲ辯護シ、其ノ無罪ヲ立證スル特權
 ヲ與ヘルト云フ此ノ方法ハ、結晶シテ具體的形

トナツタ文化ト寛容ノ近代的且ツ文明的理想ノ
 極致ニ外ナラナイデアリマス。非常ニ謙讓ナ
 心ト併シ又強イ熱意ヲ以テ我々ハ現代ニ於ケル
 我々ノ役割ヲ果ス爲ニ我々ノ職務ニ取リカ、ツ
 テ居リマス。何故ナラバサウ云フ重大ナル目的ノ助
 ケニナルコトナラバ唯一ツノ正シイ行爲ヲモ
 ナサズニ置タコトハ出來ナイカラデアリマス。
 我々檢察官ノ者ノ觀ル所ニ據リマスレバ、我々
 ノ役割ヲ盡スコトニ熱心ナ努力ヲ拂フコトニ失
 敗スルナラバ、又世界ヲ破壞スル虞アル暴力ニ
 終止符ヲ附スル爲メ列國ガ凡ユル健全ナ行動ヲ
 採ルコトニ失敗スルナラバ、斯ル失敗ソレ自體
 一ツノ宥シ難イ犯罪ヲ構成スルコトナルデア
 リマセウ。唯一ツ我々ノ怖レル所ハ我々ノ職務
 ヲ充分ニ遂行スル力量ト能力ニ缺ケテハ居ナイ
 カト云フコトデアリマス。何故ナラバ此ノ義務
 自體嚴酷ナモノダカラデアリマス。

此ノ起訴狀ニ含マレテ居ル申立ハ必然的ニ非
 常ニ廣汎ニシテ、其ノ及ブ期間ハ頗ル長ク包含
 サレル地域ハ甚ダ廣ク、被告ノ數又多ク、而
 シテ彼等ノ行使シタル權力ハ眞ニ廣キニ互ツタ
 爲メ此ノ事件ノ各方面ヲ詳細ニ述ベントスル勝
 頭陳述ガ異常ニ長ク又煩雜トナル事ハ止ムヲ得
 ナイ事デアリマス。更ニ今述ベル詳細ノ一部
 ハソレニ付テノ證據ヲ提出スル時期ニハ不明瞭
 ニナル事ガ起ルカモ知レマセン。裁判所ノ助け
 トナリ且ツ被告ニハ公平デアル様ニ裁判ヲ順序
 ヲク進行サセタキ希望ノ許ニ種々ナル面ニ關ス
 ル證據ヲ提出スル責任ヲ有スル副檢察官等並ニ
 補助檢察官等ガ起訴狀ニ記述シタル罪責ヲ證明
 スル爲ニ提出スル證據ヲ適當ナル時ニ要約スル
 デアリマセウ。

我々ハ本裁判所ノ權限並ニ管轄ヲ規定シ且ツ
 是等ノ被告ガ起訴サレタル犯罪ヲ定義スル所ノ
 適切ナル裁判所條例ヲ簡單ニ考察シヨウ。

第二章 管轄及ビ一般規定

第五條 人並ニ犯罪ニ關スル管轄

本裁判所ハ、平和ニ對スル罪ヲ包含セル犯罪ニ
 付個人トシテ又ハ團體構成員トシテ訴追セラレ
 タル極東戰爭犯罪人ヲ審理シ處罰スルノ權限ヲ
 有ス。左ニ掲グル一又ハ數個ノ行爲ハ個人責任
 アルモノトシ本裁判所ノ管轄ニ屬スル犯罪ト
 ス。

(イ) 平和ニ對スル罪即チ宣戰ヲ布告セル又ハ
 布告セザル侵略戰爭ハ國際法、條約、協定
 又ハ保證ニ違反セル戰爭ノ計畫、準備開始又
 實行、若ハ右諸行爲ノ何レカヲ達成スル爲メ
 共通ノ計畫又ハ共同謀議ノ參加

(ロ) 通例ノ戰爭犯罪即チ、戰爭法規又ハ戰爭
 慣例ノ違反

(ハ) 人道ニ對スル罪即チ、戰前又ハ戰時中爲
 サレタル殺戮、殲滅、奴隸的使役、追放其ノ
 他ノ非人道的行爲、若ハ犯行地ノ國內法違反
 タルト否ト問ハズ本裁判所ノ管轄ニ屬スル
 犯罪ノ遂行トシテ又ハ之ニ關聯シテ爲サレタ
 ル政治的又ハ人種的理由ニ基ク迫害行爲

上記犯罪ノ何レカヲ犯サントスル共通ノ計畫
 又ハ共同謀議ノ立案又ハ實行ニ參加セル指導
 者、組織者、教唆者及ビ共犯者ハ、斯カル計畫ノ
 遂行上爲サレタル一切ノ行爲ヲ付其ノ何人ニ依
 リテ爲サレタルト問ハズ責任ヲ有ス。

是等ノ不法行爲ノ總テハ、非合法的且ツ故意
 ノ人命殺戮ヲ招カスルモノデアツタ、ソレ故後刻
 詳細ニ指摘スルデアラウ通り條令中ノ本章ハ何
 モ新シイ法律ヲ作ツテ居ル譯デハナイ。正反對
 ニ本章ハ久シキニ亙リ、世界ノ人々ノ理性ト良
 心ニ於テ最モ重大ナル性質ノ犯罪行爲トシテ認
 メラレテ來タ犯罪ヲ規定シテ居ルデアアル。是
 等ノ不法行爲中ノ或モノハ多數ノ國家ガ參加シ
 タル會議ニ於テ違法ト認メラレタモノデアアル。
 或モノハ條約、宣言、決議ニ依リ、法ノ保護ヲ受
 ケ得ナイモノトサレテ來タ、又其ノ或モノハ保
 障ニ依リ犯罪的行爲トシテ事實上明カニ示サ
 レタデアリマス。兎モアレ、國際法ノ此ノ狀
 態ガ如何ナル形式ニ於テ成立シ又ハ如何ニ結晶
 サレタニモセヨ、人道ノ命令、文明ノ必求ガ是等
 ノ不法行爲ヲ不法ト認メ且ツ文明的行爲ノ範圍
 外ニ置カルベキコトヲ要求シテキルトノ充分ナ
 認識ヲ伴フテキタデアリマス。確カニ、我々
 ハ明カナコトト信ズルガ、本起訴狀中ニ起訴サ

レテキル犯罪ガ行ハレタ全期間ヲ通ジ、總テノ國ハ文明ノ存續ノ爲メニハスル犯罪ガ終熄スルコトヲ要スルヲ充分認識シテキタ。

訴ヲ提起セル十一ヶ國ハ條約ノ章條ニ從ヒ、被告ガ犯シタリト主張スル所ノ不法行爲ヲ起訴シテ明記シタリデアリマス。既ニ公開ノ當法廷ニ於ケル正規ノ手續ニ於テ起訴ハ被告ノ面前ニ於テ英語、日本語ノ兩語ヲ以テ朗讀セラレ、又ソレニ先立チ條約ノ求ムル所ニ從ヒ起訴狀ノ寫ハ一切ノ附屬書類ト共ニ日本語ニ翻譯セラレ、被告ニ正シク與ヘラレタデアリマス。

起訴狀ハ序論、戰爭犯罪問責ノ訴因及ビ細目書タル附屬書類ヨリ成リ立ツテ居ルデアリマス。不法行爲ハ三部ニ分チテ起訴サレテキマス。即チ第一類、平和ニ對スル犯罪。第二類、殺害。第三類、通例ノ戰爭犯罪並ニ人道ニ對スル犯罪デアリマス。訴因第一ハ該共同謀議ガ東亞、太平洋及ビ印度洋ノ支配ヲ確保セントシタコト、訴因第二ハ滿洲ノ支配、訴因第三ハ全中華民族ノ支配、訴因第四ハ明示サレタ十六ヶ國家並ニ國民ニ對シテ不法戰爭ヲ行ヒ訴因第一ニ記載ノ地域ヲ支配セントシタ事ヲ起訴シテキルデアリマス。訴因第五ニ於テハ被告ハ反抗スル凡テノ國ニ對シテ不法戰爭ヲ行フ事ニ依リ世界支配ヲ確保センガ爲メ獨逸並ニ伊太利ト共同謀議セル事ニ對シテ起訴サレテキマス。檢察團ハ其ノ次ノ十二ヶ國(第六ヨリ第十七迄)ニ於テ、全部又ハ若干ノ被告ガ十二ヶ國又ハ國民ニ對シテ不法戰爭ヲ計畫シ且準備シタ事ヲ攻撃ヲ受ケタ各國家又ハ國民ヲ各別訴因中ニ確認シ、起訴シテキマス。其ノ次ノ九ヶ國(第十八ヨリ第二十六迄)ニ於テハ各訴因別ニ全部又ハ若干ノ被告ガ八ヶ國又ハ國民ニ對シテ不法戰爭ヲ開始シタ事ヲ攻撃ヲ受ケタ各國家又ハ國民ヲ各別訴因中ニ確認シ、起訴シテキマス。更ニ其ノ次ノ十ヶ國(第二十七ヨリ第三十五迄)ニ於テハ、被告ガ九ヶ國又ハ國民ニ對シテ不法戰爭ヲ行フ事ヲ攻撃ヲ受ケタ各國家又ハ國民ヲ各別訴因中ニ確認シ、起訴シテキマス。

第二類ニ於テハ、殺害又ハ殺害ノ共同謀議ニ對シテハ、訴因第三十七ヨリ第五十二ニ於テ起訴シテキマス。訴因第三十七ニ於テハ海牙條約第三號ニ違反シテ又訴因第三十八ニ於テハ海牙條約第三號以外ノ幾多ノ條約ニ違反シテ若干ノ被告ガ平和時ニ之等國民ヲ攻撃スルコトヲ日本軍隊ニ命ジ爲サシメ且ツ許ス事ニ依リ亞米利加合衆國、ヒリッピン國、全英聯邦、和蘭國及泰國(シヤム)ノ國民ヲ不法ニ殺害シ殺害セント共同謀議シタ事ヲ起訴シテキマス。其ノ次ノ五ヶ國(第三十九乃至第四十三)ニ於テハ被告ハ訴因第三十七及ビ第三十八ニ示サレテ居ル八ヶ國ノ千九百四十一年(昭和十六年)十二月七日及ビ八日ニ眞珠灣、「コタバル」、香港、上海並ニ「ダバオ」ニ於テ平和時ニ日本國軍隊ニヨリ武力攻撃ヲ命ジ爲サシメ且ツ許ス事ニ依リ不法ニ殺害シ殺害シタリト起訴サレテ居リマス。被告ハ其ノ次ノ訴因(第四十四)ニ於テハ俘虜、一般人並ニ雷擊セラレタル艦船ノ乗組員ノ殺害ヲ爲サシメ且ツ許ス共同謀議ノ廉デ起訴サレテ居リマス。

本類最後ノ八ヶ國(第四十五ヨリ第五十二)ニ掲ゲラレタル罪ハ、被告ノ或ル者ガ日本軍ニ中國ノ諸都市(訴因第四十五ヨリ第五十二)及ビ蒙古並ニ「ソビエツト」社會主義共和國聯邦ノ領土(訴因第五十一及第五十二)ヲ不法ニ攻撃スルコトヲ命ジ爲サシメ且ツ許ス事ニ依リ多數ノ一般人並ニ兵士ヲ不法ニ殺害シ殺害シタ點デアリ。第三類 即チ訴因ノ最終類(訴因第五十三ヨリ第五十五)ニ於テハ他ノ通例ノ戰爭犯罪並ニ人道ニ對スル罪ガ問バレテキル。或ル特定ノ被告ハ訴因第五十三ニ於テ共謀シテ日本軍指揮官、陸軍省職員、警察官並ニ下級官吏ニアメリカ合衆國、全英聯邦、フランス、オランダ、ヒリッピン、中國、ポルトガル並ニソビエツト社會主義共和國聯邦ニ屬スル幾千名ノ俘虜並ニ一般人ニ對シテ虐待行爲並ニ他ノ犯罪ヲ犯スコトヲ命ジ依リテ條約並ニ他ノ法律ニ違反スルコトヲ命令シ授權シ且ツ許可シタル罪ヲ問ハレテキル。

若干ノ明示セラレタ被告ハ訴因第五十四ニ於テ訴因第五十三ニ記載ノ人々ヲシテ同訴因記述ノ犯罪行爲ヲ犯ス事ヲ命ジ之ガ權限ヲ與ヘ且ツ之ヲ許シタリトシテ直接起訴セラレテ居ルデアリマス。右ト同一ノ明示セラレタル被告ハ最終ノ訴因(第五十五)ニ於テ俘虜並ニ訴因第五十三ニ舉示セラレタル國家ノ一般人並ニ人民ノ保護ノ爲ニ條約、保障及ビ戰爭法規ノ遵守ヲ確保スル爲メ適當ナル手段ヲ採ルベキ彼等ノ法律上ノ義務ヲ故意ニ且ツ無謀ニ無視シテ諸戰爭法規ヲ侵犯セシ廉ニ依リ起訴サレテ居ルデアリマス。各々考慮スベキ國家ノ利益ト政策ヲ持ツテキル偉大ナル十一ヶ國民ヨリ檢察團ガ構成サレテ居ル本裁判所ノ管轄ニ屬スル幾多ノ不法行爲ニ付キ罪ニ問ハレテキル多數ノ個人ニ對スル起訴狀ノ準備ニ於テ起訴狀ガ幾多ノ主張ノ含ンデキルノハ避ケ難イコトデアリマス。各國ノ見解ヲ表明スルコトモ必要デアリ、又被告ガ有罪デアリ限リ本裁判所ガ事實ノ眞相ヲ確定シコトモ其許ニ於テ各被告ノ有罪判決ヲ確保スルコトモ亦必要デアリマス。斯カル場合ノ主張ハ重複シテキルヤウニ見エタリ、ソシテ或ル場合ニハ何レカニモ見エカモ知レマセン。併シナガラ重要デアリ且ツ事實並ニ法律ニ關シテ決定デアリハ本裁判所ノ決定デアリマス。第一類中ノ訴因支持ノ爲メ(細目要項)ハ附屬書A中ニ記述セラレテキマス。

時日、場所其ノ他ノ詳細ハ滿洲ニ始マリ諸他ノ地域並ニ期間ニ及ビタル軍事の侵略ノ諸場合ニ付テ述ベラレテ居リマス。附屬書Bニ於テハ平和ニ對スル罪並ニ殺人ノ罪ノ部ノ諸訴因ニ於テ罪ニ問ハレ居レル日本國ガ違反シタル諸條約ノ條文ガ集メラレテ居リマス。附屬書Cニ於テハ日本ガ違反セル公式保證ガ列擧シタリ、ソシテソレ等ハ第一類平和ニ對スル犯罪中ニ收録シテ居ル。戰爭法規及ビ慣例ニ關スル條約保證ハ附屬書D中ニ論議セラレテアリ、被告ガ責任ガアル戰爭法規及ビ慣例違反ノ細目ハソレニ記載シテアル。起訴狀中ニ述ベテアル犯罪ニ對スル各個人ノ責任並ニ本起訴狀ガ關係スル期間中ニ各被告ガ占メタル責任アル官職ハ附屬書E中ニ示シテアル。ドウゾソレハ本起訴狀ニテ是等被告ニ對シテ起訴サレタル罪ノ要點デアルト思フテ下サイ。次ニ考慮スベキ問題ハ本起訴狀ガ根據トシテ居ル處ノ法律デアリマス。先ツ本裁判所ニ依ツテ認定シ得ル罪ハ本裁判所條約ニ定義セラレテ居リマス。是等ハ數種ノ概括的分類ニ分チ得ルデアリマス。本起訴狀中ニ起訴サレテ居ル第一ノ犯罪ハ共同謀議デアリマス。此ノ犯罪ハ單ニ名ヲ示サレテ居ルノミテ定義ハ與ヘラレテ居リマセンカラ何カ定義ヲ下サナケレバナリマセン。此ノ犯罪ハ文明國家ノ大部分ニ知ラレ又充分認メラレテ居リマシテ其ノ大要ハ凡テノ國ニ於テ甚ダ近似シテ居ルノデ、合衆國聯邦裁判所ニ依ツテ下サレタル定義ガ此ノ犯罪ノ共通ノ概念ニ對スル適當ナル表現トシテ受入レテ支障ナカラウト思ヒマス。聯合國裁判所判例集第九十卷第二部六百九十一頁並ニ亞米利加判例集百十三卷九百七十五頁中ニ報告サレテ居ル海兵隊對亞米利加合衆國ノ事件ニ於テ、第九回ノ亞米利加合衆國巡迴裁判控訴審ハ共同謀議ノ法ヲ論議シ左ノ如ク述ベテ居リマス。即チ、『共同謀議ハ「犯罪の又ハ不法の目的ヲ、若クハ其レ自體ハ犯罪の又ハ不法のニ非ザル或ル目的ヲ犯罪の又ハ不法の手段ヲ以テ達成センガ爲ニスル協同行爲ニ依リ二人又ハソレ以上ノ結合ナリ。』(判例引用)「ソレハ犯罪目的ヲ有スル結合ナリ其ノ犯罪ノ骨子ハ意思ノ聯合又ハ結合ナリ。』

『共同謀議ハ合意ニヨリ成立ス。然レドモソレハ合意ノ結果ニシテ合意ソノモノニ非ズ。徒黨ノ間ニ於ケル明示ノ合意ハ共同謀議形成ニ必須ノモノニ非ズ。何トナレバ「若シ共同ノ目的遂行ノ爲メノ單一ノ計畫ヲ持テ徒黨全部ガ相互理解ノ下ニ共働スルト云フ行動ノ一致アラバ」其ノ合意ガ現ハル、ヲ以テナリ。』(判例引用)

「他方目的が不法ナラバ、合法的手段ニ依ルト非合法的手段ニ依ルトヲ問ハズ、ソレガ遂行サレタ場合ハ法ノ違反トナルモノナリ。」(判例引用)

「共同謀議ノ目的ハ連綿タルコト、即チ數個ノ不法行為即チ明白ナル犯意表示行為ノ實行ノ企圖タルコトナリ。」

「影ヲトモ共同謀議者中ノ一人ニ依リ該謀議ノ目的ヲ達セントスル明白ナル表示行為ガ實行サレタル時ニ犯罪ヲ構成スル。明白ナル表示行為トハ共同謀議トハ別ノモノニシテ「共同謀議」ノ目的ヲ達セントスル一行爲ナリ(判例引用)」

「明白ナル表示行為ハ犯罪の行爲者ノ共同謀議ノ目的タル犯罪其ノ物タルヲ要セズ。然レドモ、合意ヲ伴ヒ若クハ之ニ從フヲ要シ、且ツ合意ノ目的促進ノタメ實行サル、コトヲ要ス。共同謀議者中ノ一人ガ明白ナル表示行為ヲ實行セバ、ソレハ凡テ共同謀議者ノ行爲トナル。」

「共同謀議成立セル場合ニ於テ、新シキ一員ノ其ノ共同謀議ヘノ加入ハ新タナル共同謀議ヲ形成スルコトナリ。又他ノ共同謀議者ノ地位ヲ變更スルコトナリ。新加入者ハ原共同謀議者ト同様ニ有罪ナリ。共同謀議成立後、共同謀議者中ノ一員脱退セル場合、斯ル脱退ハ新タナル共同謀議ヲ形成シ若クハ殘餘ノ共同謀議者ノ地位ヲ變更スルコトナシ」

起訴サレタ夫ノ不法行為ハ種々ナル形態ニ於テ訴因第六ヨリ第三十六ニ互ツテギマス。併シナガラ是等不法行為ニハ總テ同一ノ本質の要素ガ含まレテキルノデアリマス。即チ「宣戰ヲ布告セル」又ハ「布告セザル侵略戰爭ノ計畫、準備、開始並ニ實行」又ハ「國際法、條約、協定又ハ保障ニ違背セル戰爭ノ計畫、準備、開始又ハ實行」ガ此ノ定義ノ最初ノ部分ヲトルナラバ此ノ場合本質の要素トハ「侵略戰爭」デアリマス。是ハ國際法ノ下ニ於ケル犯罪デハナイデセウカ、ソシテ起訴狀ニ言及シテアル期間中始終左様デアツタノデハナイデセウカ、我々ハ然リ、且ツサウデアツタト主張スル者デアリマス。

此ノ結論ニ到達スル爲ニ我々ハ二ツノ事柄ヲ立證致サネバナリマセン。即チ第一ハ此ノ間

題ニ關スル國際法ノ存在スル事第二ハソレガ國際法ノ下ニ於ケル犯罪デアルト云フ事デアリマス。此ノ二ツノ事ヲ立證スル事ハ本裁判ニ於ケル重要ナル課題デアルト信ジマス。

國際法ノ不可缺ナル一部トシテ是等ノ二原則ヲ法の判定ニ依リ認定シ且ツ聲明スル事ハ世界ノ文明國ニ依リテ求メラレタノハ實ニ目下開廷中ノ「ニールンベルグ」軍事裁判所ト本極東軍事裁判所ヲ以テ史上嚆矢トスルデアリマス。

我々ハ本條例第十三條ノ(d)ニ基キ時ニ依リ人ニ依リ國際法上ノ或ハ普通法或ハ一般法或ハ又自然法トシテ知ラレテキル多數ノ國際法ガ存在スルト云フ事實ヲ、本法庭ガ裁判上公知ノ事實トシテ認定スル事ヲ信ズルデアリマス。此ノ一團ノ法律ガ活キテ居テ生長シツアルト云フ事ハ次ノ如キ權威者達ニ依リ十分ニ明カニサレテ居リマス。即チ一九三四年(昭和九年)判事 CARD OZA 氏ハ米國大審院ノ意見トシテ「ニールンベルグ」對テラウエヤール事件(一九一九年、ユール、エス、三六一、第三八三頁)述ベテ曰ク

「國際法即チ國家間ヲ規定スル法ハ時ニ國家内ニ行ハレツ、アル普通法ト同様ニアル期間ノ黎明期ヲ持テ其ノ時機ニハ道義ト區別出來難キモ遂ニハ法廷ノ認定ニ依リ法的性格ヲ立證サルルニ至ルモノナリ。意見及ビ習慣ノ漸進のナル作用ハ靜カナル働キヲナシツ、アルモノデアリ「著名ナル國際法ノ權威者、ライト卿ハ彼ノ論文「國際法下ノ戰爭犯罪」ニ於テ此ノ問題ニ付キ左ノ如ク述ベテキルノデアリマス。

「此ノ題目ヲ考察セントスル人々ガ國際法ノ性質、法源、承認ノ何タルカヲ考察スルハ重要ナルコトナリ。凡ソ是等ノ人々ハ是等ノ性質法源及ビ承認ハソガ英美法即チ普通法ノ型ノモノタルト民法即チ法典化サレタル部類ノモノタルトノ別ヲ見テハ、ソレハ國內法系ノ法ノ場合ニ存スルト同一ノモノナルコトヲ見出スコトヲ期待スベキニ非ザルナリ。孰レノ型モ、ソレガ立法府若クハ裁判所ノ如キ中央立法機關ニ依リテ制定サレタル法律タル特徴ヲ有シ、更ニ

ソレヲ解釋スベキ常設ノ司法機關並ニソレヲ實施スベキ常設ノ行政府ガ存スルコトヲ特徴ヲ有ス。國際法ハ中央立法機關ヲ有セザルヲ以テ是等ノ國內制度トハ異ルモノナリ。故ニソレハ國際社會ノ法トモ云ヒ得ベシ。然レドモ該社會ハ各自ノ國法若クハ國內法ヲ有スル多クノ獨立主權國家ヨリ成立ス。故ニ、國際法ノ法源ハ國家立法機關ノ行爲以外ニ之ヲ求メザルベカラズ。國際法ハ如何ニ不完全ナリト雖モ善惡感及ビ凡ユル文明國家ニ共通ノ道義感ヲ正義ト人道ニ對スル本能ノ所産タル事ヲ認メラレンコトヲ余ハ以前ノ論文中ニ要請セリ。是ハ久シク自然法ト呼バレ來リシモノナリ。近代ニ於テハ凡テノ立派ナル人々ノ有スル本能的善惡感ヨリ流出スルモノ、又ハ凡テノ文明國民ニ共通ノ原則ヨリ出ヅルモノトナスヲ以テ一層簡明且ツ眞實ナリトス。是ノ凡ユル法ノ究極ノ基礎ニシテ且ツ基礎タルベキモノナリ。

「個人の自由ノ最モ完全ナ制度下ニ在ル社會ニ相共ニ生活セル文明人(或ハ、恐ラクハ如何ナル人モ)ハ、其ノ隣人ノ享有セル同様ナル自由ニ依リ各自ノ上ニ必要ヲ課セラルベキ束縛ヲ必然のニ受ケザル得ナイノデアルガ、之ト同様ニ國際社會ニ於テモ主權(即チ各國家ノ自由及ビ獨立)ハ、隣國ノ同様ナル自由ト尊重ノ爲メニ制限ヲ受ケザル得ナイノデアリ。近代ノ情勢ハ國家ノ相互依存ヲ逐次顯明ナラシメ國際社會ナル一般觀念モ亦出來テ來タノデアリ。其ノ時ニハ完全ナル意味ニ於テ國際社會ニナツテキルデアラウ所ノ社會ノ構成員間ノ關係ヲ定メルコトヲ任務トスル中央立法並ニ實施機關ノ如キモノガ將來出來ルモノト思フ。然シ斯カル時代ハ未ダ來テキナイノデアリ。程度ノ差コソアレ、各個ノ主權國家ノ内部ニ於テ確立セラレ居ル法支配ト其ノ性質ヲ異ニセザル國際間ノ法ヲ發達シ確立シ資スルガ如キ多數ノ法規及ビ原則ヲ發達セシムル不完全ナル努力ヲ國際法ハ表シテ居ル。

「法律ハ行爲ヲ律スル規則ヨリ成ル。立法機關モナク裁判所モナク又之ヲ實施スル行政機關モナクモ斯ル規則ハアリ得ベシ。

人々ガ普通當然ノ事トシテ之レニ服從シ或ハ之レニ順應シテ行動スル程普通ニナリタル慣習の乃至傳統的規則モアルベシ。普通ノ法律家ハ發達シテ法律トナリ結局權限アル裁判所ト官憲ニ是認セラル、ニ至ル慣習ノ理念ニ通曉セリ。然レドモ裁判所ハ法律ヲ作ルモノニアラズ。法律ヲ肯定セル者トシテ之ヲ否定スル者ト論争ヲ聽取セル後其法律ヲ宣明シ又ハ其法律ノ存在スルコトヲ決定スルノミナリ」併シ國際法ハ進歩性ヲ有シ其ノ發達期ハ一般のニ世界ノ激變期ト一致スルモノナリ。自然法及ビ道徳觀念ノ活動ガ必要ニ迫ラレテ促進サレ而シテ之等ノ法則ハ文明人類ノ一致ニ依リ意識的且又公然ニ承認サルル法律トナルモノナリ。過去四半世紀間内ニ起リシニ大世界戰爭ノ經驗ハ國際正義ヲ反映セル國際法ニ對スル各國民ノ要求並觀念ニ深刻ナル影響ヲ與ヘザル得ザルモノナリ。余ハ國際法ハ進歩セリト確信ス。蓋シ人道觀念ノ廣マリツツアル今日ニ於テ國際法ガ生キテ活動セル力タルガ爲ニハ其進歩ハ必然ナレバナリ。」

「コロンビア」法律評論(一九〇二年明治三十三年)ノ五一乃至五二頁「國際法ノ法源」中デ「フレデリック、ボロック」卿ハ慣習法ヲ論ジテ曰ク「故ニ國際法ノ證據トシテノ條約及ビ同様ナル文書ノ價值ニ關シ一般のノ記述ヲナスコトハ一例外ノ外ハ不可能ノコトナリ。其ノ例外ノ場合トハ頻度及ビ重要性ヲ增加シ居ルモノナルガソハ一般の且ツ永久の利害問題ノ規整ノ爲メニ、三ノ國家間ノ私的事項トシテニ非ズシテ一般文明國家中數及威力ニ於テ相當割合ヲ占ムルモノニ依テナサル、協定及ビ宣言ガナサル場合ナリ。最近ニ於テ「スル協定及ビ宣言」其ノ目的ノ爲ニ行ハレタ、協議會又ハ會議所産シテ本來ノ當事國ニ非ザル諸國家ノ事後參加ヲ許シ誘引スルガ如ク構成サレ居ルモノナリ。凡テ又ハ大部分ノ強國ガ一般的ニ適用サル、一定ノ法規ニ熱心シテ同意シタル時ハ其ノ承認シタル法規ハ是ニ明白ニ承認ヲ與ヘザル諸國家間ニ於テテス實際のニハ非常ナル權威ヲ有スルモノナルコトヲ疑フナシ此ノ種ノ宣言ハ孰レカノ一等國ヨリ迅速ニシテ且效力アル異議ヲ提出セラレズ

限リ適當ナル短期間内ニ各國ガ普ク認ムル法律ノ十部トシテコトヲ期待シ得ト云フモ過言デアリマセン。人々ノ間ニ於ケルニ同様各國間ニ於テモ「社會ノ指導者ノ意見ト慣習ヲ其社會全體ハノ權威アル實例ヲ作ルニシテナラズ」。

一九三四年七月二十六日、英國國務院ノ司法委員會ニ於テ海賊行為ニ關スル法律ニ付テノ多クノ初期ノ見解、特ニ一九六六年ニ起ツタ「アー、グレイ、ジョセフ、ドーソン」事件ヲ審議シタ後、大法官「サンキー」子爵ハ次ノ如ク述べマシタ。

「加之今ハ一八九九年デナク、一九三四年デア。國際法ハ十七世紀ニハ一定ノ形ニ固マツテ居ラナカッタガ然シ生命アリ且發展シタ、アル法典デア。イギリスニ於ケル教科書ノ著者タル「ホール」(一八五三年—一八九四年)ハ彼ノ國際法論文中、第三版(一八九九年)ノ序文ニ五頁ニ於テ次ノ如ク述べテ居ル。「一、過去二世紀ヲ回顧スル時、我々ハ、國際法ガ各五十年ノ終期ニ於テ、ソノ始期ニ於テヨリモ、確乎タル地位ヲ占ムルヲ見ル。國際法ハ、果進的ニ益々實力ヲ得テ、其ノ活用範圍ヲ擴張シ、些細ナ形式ニ拘泥スル事ヲ罷メ、益々進シテ國家間ノ關係ニ於ケル根本的事實ヲ詳細ニ把握シヤウトシマシタ。國際法ニ依リテ議論ノ餘地カタク配サレル地域ハ其ノ時期ニ無限ニ擴大サレタノデアツテ、國際法ハ現代人ノ記憶ニ大キク残ツテ居リマス。更ニ、例ヲ舉ゲル事ガ出來マス。國際法ノ本體ハ、航空戰、及ビ航空輸送ニ關聯シテ發達シツ、アリ、ソレニ付イテハ、一六九六年ニ、チャールズ、ヘンチス氏モ全然考ヘ及ビモシナカッタノデアリマシタ。

「若シ夫レガ眞實デナイトシレバ、是等諸條項ノ施行ハ何等意義無キモノトナル。之レヲ否定スル所論ハ國際間ノ行爲ガ、其唯一ノ目的トスル所、他ヲ誑詐、欺瞞スルニアルトナスニ至ル迄低下セラル事、各國家ガ國際間ノ文書ニ自己ノ名ヲ記スニ當リ其意圖スル所ハ相互ニ相手方ヲ欺クニアルト云フ事以外何等ノ意義モナイ事トナル。併シ斯カル無稽ナ主張ハ、既往ニ於テ幾度

カ否定サレタ所デアリ、國際法廷ハ國際法上ノ一般編纂ヲ承認シタデアル。是ハ次ニ述べル二ツノ例ニ依テ立證サレル。國際正義當置裁判所ノ千九百三十六年出版令集中ノ第三十八條ニ次ノ如キ規定ガアリマス。即チ「裁判所ハ左ノ適用ヲ爲ス。

一、保單國ニ依リ明ニ認メラレタル規則ヲ確立スルニ及ハハ特別ノ國際條約。

二、法トシテ認メラレタル一般慣行ノ證トシテメ國際慣習。

三、文明國ニ依リ認メラレタル法ノ一般原則。

四、法則決定ノ補助手段トシテノ裁判上判決及ビ諸國ノ最優秀ノ公法學者ノ學說。但シ第五十九條ノ規定ハ之ヲ留保ス。本規定ハ當事國ノ合意アルトキハ裁判所ガ衡平ト善トニ基キ裁判ヲ爲スノ權限ヲ害スルコトナシ。」

米獨兩國間ノ千九百二十三年(大正十一年)八月十日ノ協定ニ依リ設立セラレタ米獨混合賠償委員會ハ實行決定第二號ニ於テ次ノ通決定シマシタ。即チ其ノ判決ニ付テハ委員會ハベルリン條約ノ條項ニ準據スルコト但シ「損害ノ程度ヲ決定スルニ付該文書中ニ通用スベキ條項ナキ場合ニハ委員會ハ左ノ各項ヲ通用スルコトヲ得(イ)合衆國及獨逸ニ依リ明示ノ認メラレタ規則ヲ確立スルニ及ハハ特別ノ國際條約(ロ)法トシテ認メラレタル一般慣行ノ證トシテメ國際慣習

(ハ)成文法又ハ裁判ノ判決ニ依リ確立セラレタル合衆國及獨逸ニ共通ノ法則

(ニ)文明國ニ依リ認メラレタル法ノ一般原則

(ホ)法則決定ノ補助手段トシテノ裁判上ノ判決及ビ諸國ノ最優秀ナル公法學者ノ學說、但シ

(ヘ)委員會ハ何等特定メ法典又ハ法則ニ依リ拘束セラレルモノニ非ズシテ正義衡平及誠實ニ準フベキモノナリ」

國際法ノ性質ト其ノ發生及ビ多數ノ文明國ガ一般ノ福祉トナル事項ニ自發的ニ一致スルヤウ行動スル場合ニハ即チソレガ國際法ノ一原則トシテ認ニレルニ至ルハデアルト云フコトヲ明ニ

シマシタノデ、今侵略的、戰爭ノ問題ガ斯クモ多數ノ國ニ依リテ考察サレ且ツ是等ノ國々ニ依リテ熱心ノ結果法律違反トサレレバ是等ノ國々ノ滿場一致ノ判決ハ國際法ノ一般原則ノ權威アルモノトシテコトヲ行爲ガ發生シタ迄カ以前、侵略戰爭ハ違法ナリト宣告サレテ居マシタ。現世紀ノ初期カラ世界ノ文明國ハ戰爭開始ヲ防止シ始メマシタ。一八九九年(明治三十二年)開催サレマシタ最初ノ「ヘーグ」會議ニ於テ世界各國ハ相互間ノ紛争ヲ出來ル限リ平和ナ方法ヲ解決スル事ニ同意シマシタ。一九〇七年(明治四十年)ノ第三回「ヘーグ」會議ニ於テハ同政策ガ再ビ確認サレ且ツ日本ヲ含メ本起訴狀ニ包含サレル總ベテノ國家ハ「契約當事國ハ條理アル宣言布告又ハ條件附宣言布告ヲ爲メノ最後通牒カ執レカノ形式ニ依リ事前且ツ明示ノ警告ナクシテ相互間ノ敵對行爲ヲ開始ス可カラズ」ト云フ事ニ協定シマシタ。該協定ニ依リテ宣言布告ヲ爲サザルテ格印ヲ押サレマシタ。「一九一九年(大正八年)ニ戰勝國ハ日本モ其一員トシテ、國際法ノ侵犯ハ裁判サルベキ犯罪デアアルコトニ同意シタ。

第一次世界戰爭ノ終結ノ時ヨリ始メ、世界ノ主要國家ハ相繼グ協約及ビ條約ニ依リ「侵略戰爭ハ國際的犯罪ヲ構成スル」ト明確ニ宣言シテ國際法ノ進歩ニ更ニ確固タル一步ヲ進メマシタ。此ノ聲明ハ國際會議ノ平和的解決ニ關スル「ジュネーヴ」議定書ノ一部デアリマシテ四十八國家ノ代表ニ依リ調印サレマシタ。是ハ一九二七年國際聯盟第八會議ニ滿場一致テ始同一言葉ヲ贊成サレマシタ。日本ハ是等書類ノ兩方共ニ調印國デアシタ。

政馬ノ「ハバナ」ニ會合セシ千九百二十八年(昭和三年)ノ第六回汎米利加會議ハ更ニ一步前進シテ侵略ニ關スル決議ヲ採擇シマシタ。ソシテ其ノ前文ニ於テ明示シ「侵略戰爭ハ人類ニ對スル國際的犯罪ヲ構成ス」ト言明シテ居リマス。而シテ其ノ決議ハ更ニ「凡テノ侵略ハ違法ナリト考ヘラレル、ソシテ違法トシテ禁止サ

レタルモノト宣言サレル」ト言明シテ居リマス。千九百二十八年(昭和三年)八月二十七日巴里ニ於テ調印サレタル「ケロッグ、ブリアン」條約ニ依リテ日本ヲ含メ世界ノ殆ド全文明國社會ヲ網羅スル條約ハ國際會議解決ノ爲メ戰爭ニ訴フルコトヲ非難シ國家相互間ノ關係ニ於テ戰爭ヲ國策遂行ノ具トスルコトヲ否認シテ居リマシタ。本條約ノ本文ハ「犯罪」ト謂フ文字ヲ使用シテ居リマセガ「國策遂行」ノ具トシテ「戰爭ヲ排撃スルコトニ依リテ締約國ガ侵略戰爭ノ方法ヲ法律ノ外ニ置ク意思ナリシコト即チ此ラ違法ナルモノトスル考ナリシコト明瞭デアリマス。是等ノ誓約及ビ協約ハ氣輕ニ排斥セラレベキモノデハナイ、是等ノ誓約協約ハ反古紙デハナイ、又反古紙デハナカッタノデア。世界ノ一般の良心ノ要求ニ應ジテ行動シ、千九百二十八年(昭和三年)迄ニ世界ノ全文明國家ハ嚴肅ナ契約並ニ協定ニ依リ侵略戰爭ハ國際的犯罪ナリト認メ且ツ公言シマシタ。ソシテ斯クスルコトニ依リ國際法ノ實定法則トシテ戰爭ノ違法性ヲ確立シタノデアサマス。國家間ノ法律ガ侵略戰爭ヲ保護外ニ置クト云フ事ヲ示シタノデ次ニ侵略戰爭ト何ゾヤト云フ事ヲ決シナレバナラス、

千九百四十三年(昭和十八年)ウエブスタ國際大辭典第二版ハ侵略行爲ヲ次ノ如ク定義シテキル。即チ「最初ノ又ハ排發セラレザル攻撃、乃至敵對行爲。戰爭又ハ紛争ニ導ク最初ノ傷害行爲乃至最初ノ行爲。襲撃。及ビ攻撃。侵入ノ實行。侵略戰爭ノ如シ」。「紛争解決ヲナスニ當リ仲裁裁判ニ付スコト又ハ仲裁裁判判定ノ受諾又ハ他ノ如何ナル平和的方法ヲ拒絶シ實力ノ行使又ハ戰爭ニ訴フト威嚇スル國家」。「ゼー、ムス、テイ、シヨットウエル」ハ其著書、「國家的政策ノ具トシテノ戰爭」第五十八頁ニ「斯様ニ定義シテ居マス。「侵略者トハ紛争問題ヲ以テ平和的解決ニ委ヌベシト同意シ而モ其誓約ニ違反シテ戰爭ニ訴ヘル國家デア」ト。

平和ニ對スル罪ノ次ノ部分ハ國際法、條約、協定、保障ニ違反シテ戰爭ノ計畫、準備、開始又ハ實行ニ關スルモノデアリマス。茲デハ法律

ハヨク精確ニ解説サレテ居リ、幾世代ニ亘リ施行サレテ來マシタ。二國又ハ其ノ以上ノ國家ガ嚴肅ナル協約又ハ協定ヲ爲シタ時、特ニソレガ權威アル條約ニマテ進展シタ場合ニハ各國家ハ常ニ其ノ條件ニ東顧サレルモノト考ヘラレテ來マシタ。此ノ事ガ眞理デアリ、國家裁判所モ亦國際法ノ一般體テ承認シテ居ルト云フコトハ次ノ二ツノ解説ニ依ツテ證明サレテ居ラス。

我々ノ結論ガ國際法者ノ是認スルトコロデアコトハ次ニ掲ゲルライト卿ノ「國際法ニ於テ戰爭犯罪」ト題スル論文ノ引用文ガ示シテキマス。

「各國家ハ海ヲメカラザル自衛權ヲ有ス。併シ侵略戰爭ハ此正當性ノ外トス。戰爭ハ惡事ナリ。一九三九年(昭和十四年)ノ戰爭ハ之ヲ稱シテ會テ人類ノ蒙リタル最大ノ禍患ト云フモ誇張ニハ非ザルナリ。侵略戰爭ヲ開始スルコトハ斯クシテ意ニ犯罪タルノミナラズ亦戰爭犯罪ノ主ナルモノナリ。ソレハ其ノ範圍ガ全般ナル事ニ於テ個々ノ戰爭法規ノ違反ニ包含サレル特定の不法行為トナレリ。ソレハ總テノ蓄積セル害惡ナリ。出來得ル限り最モ武道的且人道的方法ニテ行ハレル戰爭ナルモノヲ考ヘ得ルトスルモ、若シ不正ナル戰爭ナレバ其ノ戰爭ノ開始ハ依然トシテ犯罪ナリ。ソレハ平和ニ對スル犯罪ナルベシ。」

我々ハ此處ニ日本ノ行動ガ未曾有ノ裏切りニシテ且不義ナル事ヲ示スベキ段階ニ立チ至ツテ居リマス。千九百四年(明治三十七年)日本ハ通知モ警告モナシニ、旅順口ヲシテ艦隊ヲ攻撃シテ日露戰爭ノ發端ヲナシマシタ。世界文明國ハ此ノ行為ガ二度ト行ハレルナラバ我慢ナラヌト認メマシタ。斯ル狀態ノ下ニアツテハ國民ノ平和ナ商業生活ヲ墮息セシメル様ナ大且ツ堪ヘ難キ負擔トナル費用ヲ使ツテ各國家ハ四六時中充分ニ武裝シ警戒シテ居ラネバナナカツタデアリマセウ。

此ノ場合ニ於ケル日本ノ裏切り爲ノ直接結果ハ「敵對行為ノ開始ニ關スル」千九百七年(明治四十年)ノ海牙條約第三號デアリマス。其ノ條

約ニ於テ本起訴狀ニ於テ提訴セル各國家並ニ日本ハ一致シテ第一條ニ次ノ如ク述ベテキルコトデアリマス。即チ「理由ヲ附シタル開戰宣言ノ形式又ハ條件附開戰宣言ヲ含ム最後通牒ノ形式ヲ有スル明確且事前ノ通告ヲナクシテ其ノ相互間ニ戰爭ヲ開始スベカラザルコトヲ承認ス。」

當時尙有效デアツタ斯ノ協定ノ下ニ於テ通知又ハ警告ナシニ千九百三十一年(昭和六年)九月十八日奉天、長春及吉林ニ對シテ爲サレタル攻撃及ビ千九百三十七年(昭和十二年)十二月十二日南京ニ對シテ千九百四十二年(昭和十六年)十二月七日及八日ニ眞珠灣、馬尼刺、「ダウアオ」及ビ香港ニ對シテ爲サレタル其ノ後ノ同様ノ攻撃ハ合法的行爲デアツタデアラウカ。吾人ハ然ラズト主張スルコトデアリマス。吾人ハ本訴訟ニ於テ是等ノ各個ノ及ビ總テノ攻撃ガ事前且明確ナル警告又ハ如何ナル種類ノ最後通牒ナシテ行ハレ且實際ノ處眞珠灣ニ對シテ攻撃ガ行ハレタ其ノ時ニ於テ日本ノ代表者ハ虛欺ナル安全感ヲ起サセントノ企圖ヲ以テ華府ニ於テ合衆國政府ト不信實ニモ接觸ヲ致シテキタコト云フコトヲ爭フ餘地ノナイ證據ニ依リ示シマセウ。我々ハ先述ベタ各個並ニ總テノ攻撃及ビ今回事ガナカツタ多クノ他ノモノガ、侵略戰爭行爲トシテ、又條約侵犯無警告攻撃トシテ違法行爲ヲ構成シタコトヲ開示シヨウ。更ニ進ンデ此ノ起訴狀ニ指名サレタ被告ノ各人並ニ總テガ此ノ不法ナ所爲ニ重要ト役割ヲ演ジタコトヲ、更ニ又被告等ガ日本ノ條約上ノ義務並ニ彼等ノ行爲ガ犯罪的デアアル事實ヲ充分ニ認識シタ上テ行動シタコトヲ開示シヨウ。是ニ於テ被告ハ是等ハ單ニ空疎ナル約束ニ過ズト論争スルモノデアラカ、果シテ然ラバ如何ニ論争ヲ以テ此ノ假定ヲ基礎付ケヨウトスルンデアラカ換言スレバ國家ハ全國人ガ全國内ニ於テ彼等ガ爲ストコロノ種々ナル約束ヲ尊重スル事ナクシテ、規律アル存在トシテノ生活ヲ期待シ得ヌイト同様、他國トノ間ニ嚴肅ニ制定セラレタル條約ヲ守ルコトナクシテ他國ト共存信賴ヲ期待シ得ナイデハナイカ。斯ノ如キ處置ノ趣クトコロハ世界の無政府ニ過

ギナイデハナイカ、然シテ斯ノ如キ世界の無政府ハ今日此ノ時代ニ於テ是以上許サレテヨイモデアラカ、是等ハ實際適切ナル質問デアリ、我々ハ其ノ答ニ付イテ殆ド疑ヒヲ持タナイ。

犯罪行爲ヲ行フ者ハ其ノ行爲ノ自然的且蓋然の結果ニ對シテ充分又個人的ニ責任ナルコロトハ總テノ文明社會ノ充分ニ認メラレタ法則デアリマス。被告ハ戰爭ノ實行ハ人命ヲ奪フ事ヲ意味スルコトデアルト云フコトヲ否定スルコトガ出來マセウカ、何等法律上ノ正當性ノ無イ人命ヲ奪取ハ殺人デアリ歴史ノ始カラ斯ク認メラレテ來タデアリマス。ソレ故我々ハ是等被告ノ各自及ビ總テガ本起訴狀ニ於テ起訴サレテ居ル殺人ニ付キ有罪デアルコトヲ開示シヨウ。被告等自身ノ國ノ法律ノ下ニアツテサヘ是等ノ被告人ハ有罪デアリマス。日本ノ刑法第二十六條第九十九條(シールド)百四十八頁ニ本犯罪ハモット一般的ノ言葉ヲ説明サレテキマス。即チ「人ヲ殺シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ三年以上ノ懲役ニ處ス。」

同法第二百三條ハ殺人ノ實行ニ著手スルコトヲ罰スベキモノトシテアリマス。而シテ第二百一條ハ單ニ一人ノ者ガソレニ關係シ、共同謀議ノ普通要素ガ存在スルコトナキ場合又ハ豫備ガ實行ノ著手ノ段階ニ達シナイ場合ニ於テサヘ殺人ヲ犯ス目的ヲ以テ單ニ豫備ヲ爲シタルモノヲ犯罪ト爲シテ居リマス。文明國ニ於ケル殺人ノ普通ノ定義ハ法律上正當性ナクシテ人ヲ故意ニ殺スコトデアリマスカラ我等ハ恐ラク「法律上ノ正當性ヲ構成スルモノヲ考ヘネバナラヌデアリマセウ。」

此ノ正當性ハ身體又ハ財産ノ防禦或ハ恐ラク死刑執行人ノ場合ニハ正當ニ構成セラレタ裁判所ノ命令ヲ單ニ遂行シタコト云フ場合ニ普通限ラレテ居リマス。本裁判ニ於テハ、死亡者ハ總テ交戦又ハ戰爭ノ結果トシテ生ジタモノデアリ、且ツ戰爭ガ不法デアツタガ故ニ其ノ戰爭ト云フ本源ノ行爲カラ生ズル凡ユル自然的正常的ナル結果モ亦不法ナデアリマス。此ノ事ハ日本ノ法律ノ下ニ於テスラ眞實ナデアリマス。

既ニ述ベタ理由ノ外ニ、日本ノ陸海軍ハ、一部ハ文明國ノ慣習ニ依リ一部ハ條約、協約、及ビ保障ニ依リ確立サレタル「陸戰ノ法規慣例」ニ依ル義務ヲ有シテキタデアリマス。ソレト此ノ條約、協約及ビ保障タルヤ或ハ直接ニ陸海軍ニ對シテ拘束力ヲ有スルカ或ハ既ニ定マリ承認セラレタル法則ノ證據タルモノデアリマス、是等ノ慣習ノ證據トシテ日本モ其ノ當事者ノ一員タリシ一九〇七年(明治四十年)十月ノ海牙條約第四號ハ次ノ如ク規定シテキルコトデアリマス。

「締約國ノ見解ニ依レバ軍ヲ要求ノ許ス範圍ニ於テ戰爭ノ害惡ヲ輕減セントスル願望ニ依リ動かサレ起案セラレタル此等ノ規定ハ住民ニ對スル關係ニ於ケル交戦者ノ行動ノ一般規則トシテ役立タシメントスルニアリ。」

サレド實際生起スル凡ユル事態ヲ包含スル規約ノ協定ハ目下ノ處不可能ナリ。

他面締約國ハ成文協定ノナキ場合、不慮ノ事件ハ軍司令官ノ恣意の見解ニ委スベシトスル意圖ニ非ルコト明カナリ。

一層完全ナル戰爭法規作成セラレル迄ハ締約國ノ採用ニカ、ル法規ニ該當セザル事件ニ於テハ住民及ビ交戦者ハ其ノ起源ヲ文明國民ノ間ニ確立サレタル慣例、人道及ビ一般良心ノ命令ニ有スル國際間ノ原則ノ保護、適用ヲ受クベシト宣言スルヲ以テ得策ナリト思考セルモノナリ。」

此ノ條約ノ附屬書第一部第一章第一條ノ一部ニ於テ左記ノ通り定メテアリマス。

「戰爭ノ法規及ビ權利義務ハ單ニ之ヲ軍ニ適用スルノミナラズ左ノ條件ヲ具備スル民兵及義務兵團ニモ之ヲ適用ス」

一、部下ノ爲ニ責任ヲ負フ者其ノ頭ニ在ルコト

四、其ノ動作ニ付戰爭ノ法規慣習ヲ遵守スルコト

後ニ明示の二言及サレル俘虜並ニ傷病者ノ取扱ニ關スル他ノ規定ガ之ニ續イテキマス。第三十三條ノ一部ニ於テ左記ノ通り定メテアリマス。

「特別ノ條約ヲ以テ定メタル禁止ノ外特ニ禁

部ハ文明國ノ慣習ニ依リ一部ハ條約、協約、及ビ保障ニ依リ確立サレタル「陸戰ノ法規慣例」ニ依ル義務ヲ有シテキタデアリマス。ソレト此ノ條約、協約及ビ保障タルヤ或ハ直接ニ陸海軍ニ對シテ拘束力ヲ有スルカ或ハ既ニ定マリ承認セラレタル法則ノ證據タルモノデアリマス、是等ノ慣習ノ證據トシテ日本モ其ノ當事者ノ一員タリシ一九〇七年(明治四十年)十月ノ海牙條約第四號ハ次ノ如ク規定シテキルコトデアリマス。

「締約國ノ見解ニ依レバ軍ヲ要求ノ許ス範圍ニ於テ戰爭ノ害惡ヲ輕減セントスル願望ニ依リ動かサレ起案セラレタル此等ノ規定ハ住民ニ對スル關係ニ於ケル交戦者ノ行動ノ一般規則トシテ役立タシメントスルニアリ。」

サレド實際生起スル凡ユル事態ヲ包含スル規約ノ協定ハ目下ノ處不可能ナリ。

他面締約國ハ成文協定ノナキ場合、不慮ノ事件ハ軍司令官ノ恣意の見解ニ委スベシトスル意圖ニ非ルコト明カナリ。

一層完全ナル戰爭法規作成セラレル迄ハ締約國ノ採用ニカ、ル法規ニ該當セザル事件ニ於テハ住民及ビ交戦者ハ其ノ起源ヲ文明國民ノ間ニ確立サレタル慣例、人道及ビ一般良心ノ命令ニ有スル國際間ノ原則ノ保護、適用ヲ受クベシト宣言スルヲ以テ得策ナリト思考セルモノナリ。」

此ノ條約ノ附屬書第一部第一章第一條ノ一部ニ於テ左記ノ通り定メテアリマス。

「戰爭ノ法規及ビ權利義務ハ單ニ之ヲ軍ニ適用スルノミナラズ左ノ條件ヲ具備スル民兵及義務兵團ニモ之ヲ適用ス」

一、部下ノ爲ニ責任ヲ負フ者其ノ頭ニ在ルコト

四、其ノ動作ニ付戰爭ノ法規慣習ヲ遵守スルコト

後ニ明示の二言及サレル俘虜並ニ傷病者ノ取扱ニ關スル他ノ規定ガ之ニ續イテキマス。第三十三條ノ一部ニ於テ左記ノ通り定メテアリマス。

「特別ノ條約ヲ以テ定メタル禁止ノ外特ニ禁

止スルモノ左ノ如シ

口敵國又ハ敵軍ニ屬スル者ヲ背信ノ行爲ヲ以テ殺傷スルコト...

本裁判所條例ニ於テ次ニ言及サレテキル犯罪ノ種類ハ「人道ニ對スル罪」...

法違反デアリマス。是等ノ犯罪ニ適用スベキ法律ハ其ノ附屬書及附隨規則ヲ含ム...

戰爭犯罪ノ所テ述ベテ置イタ通りデアリマス。是等ノ殺人ハ同様ナルヤリロク...

以上十一ヶ國ノ代表タル本檢事團ハ右ノ見解ガ其ノ各自ノ國內ニ於テ施行セラル...

又ハ不法行爲ト記ノ如キ軍事委員會ガ戰爭法規ニ依リ裁判シ得ルコト...

以上十一ヶ國ノ代表タル本檢事團ハ右ノ見解ガ其ノ各自ノ國內ニ於テ施行セラル...

是迄ニ正確ニ解釋サレタ共同謀議ニ關スル通常ノ法律ニ依リ、共同謀議ニ參加セル各個人...

依リ不法ノ戰爭ヲ共同謀議シ、計畫シ、準備シ、開始シ且實行シタ...

本裁判所ニ提出セラレタ證據ニ依ッテ合理的ナ疑問ノ餘地ナキ程ニ、是等被告ガソレニヨリ...

是等高位ノ文官達ノ個人的責任ト云フモノガ本法廷ニ提出サレル國際法上ノ最重要ナ問題...

戰爭政策ニ參與シタ文官ニ依テ支配サレ統率サレタ政府ハ、侵略戰爭ヲ行フコトニ依ル世界ノ非難並ニ明示ノ條約ニ依ル義務違反ニ對スル責任ヲ免レシト努力シ、又日本臣民中、滿洲問題ノ平和的解決ヲ主張シタ者ヲ欺カント勉メ其ノ後ノ數多クモ、原型トナツタ滿洲傀儡政權ヲ樹立シ之ヲ維持スルコトヲ通策ニ訴ヘタリデアリマス。日本ノ政策ノ責任ヲ擔當シタ人々ノ武力ニ依ル膨脹計畫履行ノ決意ヲ現レトシテ、日本ハ國際聯盟ヨリ脱退シ、「ロンドン」海軍條約ヲ遵守セズ事又ハソレニ依ル建艦計畫ニ關スル情報ヲ提供セズ事ヲ正式ニ決定シ、「ブラッセル」ニ於ケル九ヶ國條約會議ニ出席スルコトヲ拒絶シ日本ハ信託ヲ棄切ツテ委任統治諸島ヲ要索化シマシタ。日本ハ千九百三十七年即チ昭和十二年支那ニ對シ大規模ナ軍事侵略ヲ行フニ先立ち獨逸トノ同盟ヲ求メ千九百三十六年即チ昭和十一年十一月二十五日防共協定トシテ知らルル同盟ノ締結ニ成功シ同日更ニ獨逸トノ秘密條約ヲ締結シタデアリマス。日本ハ世界ニ對シ日獨協定ハ單ニ共產インテナーナシヨナルニ對スル兩國間ノ提携協力ヲ規定シタルニ過ギズシテ他ノ如何ナル特定國ヲ對象トスルモノニ非ザル旨ヲ宣言シタデアリマスガ、眞實且事實ニ於テ此ノ秘密條約ハ防共協定ヲソグゼット聯邦ニ對スル軍事同盟ニ變貌シテシマツタデアリマス。而モ其ノ協同侵略ノ序幕トモ云フベキ此ノ協定ハ單ニソグゼット聯邦ヲ對シテノミニナラズ總テ民主主義國家ニ對シテ指向サレタモノデアルト云フコト、此ノ事ハ證據ニ依ツテ證明サレマス。證據ハ此ノ協定ノ目的ガ二重性格ノモノデアルトヲ提示シテ居リマス。第一ニハ同盟ノ力ニ依ツテ北方ニ於テハソグゼット聯邦ヲ抑制シ、ソレニ依ツテ日本ハ南進ノ自由ヲ與ヘルコト、第二ニハ此ノ協定ハ表面上共產インテナーナシヨナルヲ其ノ對象トシテ居ルノデ支那ヘノ不斷ノ軍事經濟的侵入ニ對スル口實ト隱微物トシテ用ヒラレル事ガ出來又實際用ヒラレルデアリマス。軍事規約ハ其ノ内容ガ判ルト提案中ノ漁業條約ニ關シ當時日ソ間ニ進

行中ナリ交渉ヲ複雜ニシ又延引スルハ虞レガアルト云フ理由ヲ秘密條約中ニ織込マレタデアリマス。併シナガラ中華民族ニ於ケル軍事侵略ノ結果トシテ日ソ間ニ戰爭ノ起ル危險ヲ此ノ秘密條約ヲ適當ノ時期ニ發表スルコトニ依ツテ避ケヨウト意圖シタデアリマス。日本ハ滿洲橋樑事件後數ヶ月内ニ中華民國ノ抵抗ヲ破損シ得ルモノト豫想シテ居リマシタ。併シ之ニ失敗シマシタノデ千九百三十八年即チ昭和十三年一月十六日ニハ若シ日本ガ武力ニ依ル膨脹計畫ヲ繼續スル場合ニハ、日本ハ中華民國ニ對シ必然的ニ一大戰爭ヲ遂行シナケレバナラナイトノ結論ヲ下サネバナラナカッタト云フコトガ示サレレデアリマセウ。一九三八年即チ昭和十三年二月カラ日本及ビ獨逸ハ一層緊密ナ軍事同盟締結ノ工作ヲナシ始メ、是ハ民主主義國家ニ對スル彼等ノ陰謀ニ於ケル新シキ段階トナルベキモノデアッタ。獨逸ハ世界ニ對抗スル爲メ同盟ヲ欲シ日本ハ首要的ニハソ聯ニ對抗スル爲メ、副次的ニハ他國ニ對抗スル爲メ更ニ強力ナル同盟ヲ欲シマシタ。日本ハ彼等ノ將ニ行ハントシテ居ル所ノ世界ノ分割ニ當リ、自分等ノ分テ前ヲ得ル爲ニ極力ニ於テ彼等ノ始メテ侵略ノ實現ヲ可能ナラシムル情勢ヲ近々創リ出ス爲ニ中華民國ニ對スル侵略戰爭ヲ成功ニ解決スル爲メ「戰爭準備ヲシナガラ平和ヲ語ル」政策ヲ採用シテキタ歐洲ノ新興ニ侵略國タル獨逸及ビ伊太利ト同一陣營ニ在ルコトヲ欲シマシタ、斯カル同盟ヲ目的トスル交渉ハ一九三九年即チ昭和十四年八月二十三日獨逸ノ不可侵條約ハ締結ニ依ツテ一時中止サレタデアリマス。日本ハ中華民國ノ南方ニ位スル地域ニ自由ニ武力發展ヲ爲ス爲メ對華侵略戰爭ヲ成功ニ終結スルヤウ一層ノ努力ヲシマシタ、關領、佛領其他ノ南洋諸領領土ニ對スル侵略目的モ亦定メラレマシタ、日本ノ計畫ノ中ニ「イギリス」聯邦及ビ必要ニ依ツテハ合衆國トノ對米戰爭モ亦包含サレテ居マシタ、斯様ナ事情ヲ獨逸トノ軍事同盟ノ交渉ハ更新サレ前例ノナイ速サデ一九四〇年即チ昭和十五年九月二十七日三國同盟ノ締結トナ

ツテシマツタデアリマス。此ノ條約ハ其ノ本質ニ於テ、世界ヲ分割シテ所謂新秩序ヲ建設セントスル侵略國ノ陰謀ノ發展ヲ意圖スルモノデアルガ、此ノ新秩序ノ目的タルヤ全世界ノ民主主義ヲ絶滅セシメ、總テノ國ノ人民ヲ侵略國ノ隷屬トシ置カントスルモノデアリ、此結果ヲ達成スル爲メ軍部ハ一九四〇年即チ昭和十五年七月内閣ノ倒潰ヲ來シメ後繼内閣ノ外相及ビ陸相ノ位置ニハ松岡ト東條方夫ヲ就任シタデアリマス、右兩名共日本ノ外交政策ノ冠石トシテ獨逸トノ軍事同盟ノ信奉者デアリマシタ。證據ニ依レバ日本ハ共同謀議ノ初期ヨリ其ノ大東亞政策ヲ實行スル爲メ亞米利加合衆國ニ對シ戰爭ヲ行フ決心ヲ爲シテ居タ事ガ知ラレマス、此ノ同盟ニ使用サレテ居ル「太東亞」トハ佛領印度支那「シヤム」、「ビルマ」、海峽植民地、其レニ關領東印度諸島ヨリ「ニューギニー」、「ニュー、カレドニア」ニ至ル大洋洲群島ヲ意味シ、漸次擴張シテ早晩歐洲、新西蘭、印度及ビ東部西比利亞ヲ包含スル目的デアリマシタ。獨逸トノ軍事同盟ニ依ツテ日本ヲ大東亞ニ於ケル指導國トシ獨逸ヲ歐洲ニ於ケル指導國トシテ認メ世界新秩序ヲ創設セントシタデアリマス。又密約ニ依ツテ調印國ハ協議ニ依ツテ亞米利加合衆國ノナセル一行動又ハ一聯ノ行動ガ、該同盟ノ意味スル「攻撃」ヲ構成スルモノト看做サルベキヤ否ヤヲ決定スル權利ヲ有スル事ニナサレテ居リ、而シテ攻撃ト看做ス旨ノ決定ヲ見タ場合ニハ軍事及ビ其ノ他ノ援助ニ關スル規定ガ自動的ニ發動スルコトニナサレテ居マシタ。是等十一ヶ國ノ提議國及ビ國民ハ起訴サレテキル共同謀議者等ガ一九四〇年即チ昭和十五年及ビ一九四一年即チ昭和十六年ノ最初ノ十一箇月間ニ開戦ニ向ツテ彼等ノ計畫ヲ準備トシテ加速的ニ進メタコトヲ示スデアリマセウ。一九四一年即チ昭和十六年十一月ヨリ、一九四五年即チ昭和二十年ノ九月迄ノ四箇年間に此等ノ被告ガ東西一萬哩以上及ビ南北五千哩ニ互ル舞臺ニ於テ太平洋及ビ印度洋域ノ大陸並ニ島嶼ノ近接諸國民ニ陸海空ヨリスル殘虐極マル且

ツ最慘暴スベキ作戰命令ニ依リ戰爭ヲ廣シタコトヲ證據ヲ提出致シマス。是等共同謀議者達ガ計畫ヲ準備ノ十年間カラ無法ト侵略ノ戰爭ノ開始ト遂行ノ時期「移ル」ニ連レテ共同謀議ノ詳細ナ情報ガ益々明白ニナツテ來タデアリマス、該共同謀議ハ世界ノ制壓ヲ目指シテ「ヒットラー」ノ獨逸ト「フアシスト」ノ伊太利ト徹底的ノ同盟ヲ結ブ局面ハ決定的ニ入ツタデアリマス、一例ヲ舉グレバ一九四一年（昭和十六年）三月二日被告大島ト獨逸外務大臣「リッペンロップ」ガ征服ニ依ル南極物ヲソレゾレノ國デ分配スル事ヲ協定シタデアリマス、伊太利ハ其ノ後ノ協定ニ依リ將來ノ分捕品ト南極物ノ分前ニ與ルベク參加シタデアリマス、日本獨逸及ビ伊太利ノ間ニ外交關係ト陸海軍ノ作戰ニ關シテ緊密ナ聯繫ト諒解ガ成立シ且保持サレタ事ガ實證サレマセウ。是等提議國ハ或ハ隱密行動欺瞞及ビ背信ニ依ツテ千九百四十一年（昭和十六年）十二月七日「八日」ニ眞珠灣ニ於テ米國ニ「コタバル」、香港、上海ニ於テ英國ニ「ダヴァオ」ニ於テ比律賓ニ、對シ不法ノ敵對行爲ヲ起シ又ハ始メタ事ヲ示スデアリマセウ。共同謀議ノ此ノ面ニ於ケル故意ノ犯罪の意圖ハ伊太利ノ千九百三十五年（昭和十年）「アビシニア」ニ對スル、日本ノ千九百三十七年（昭和十二年）中華民國ニ對スル、「ヒットラー」獨逸ノ千九百三十九年（昭和十四年）、千九百四十年（昭和十五年）及ビ千九百四十一年（昭和十六年）ニ於ケル電撃戰ニ依ル「ポーランド」及ビ他ノ諸國家ニ對スル電撃戰ヲナキ攻撃ニ關聯シテ見ラレレデアリマセウ。更ニ「ヒットラー」ガ被告大島ニ日本軍ガ攻撃シタノデ「歡喜」ヲ表シタコト、日本ガ宣戰布告ナキ攻撃ヲ爲シタノハ當然ノ事ト云ヒ「ヒットラー」自身答テ同様ノ行動ヲナシタコト又將來ニ於テモ同様ノ行動ニ出スルコトアルベキヲ附言シタ事ヲ證據ハ更ニ示シマス。是等犯罪的攻撃ニ於テ提議諸國ノ五千有餘ノ國民ガ不法ニ殺害及ビ殺戮サレタ事ガ更ニ示サレレデアリマス。茲ニ起訴セラレタル指導者達ニ依ツテ戰爭遂行上採用セラレ又ハ容認セラレタ型式

ハ彼等ノ共同謀議者仲間テアル「ナチス」獨逸人
ガ其ノ常套戰術タルテロ行爲、狂暴暴徒ナル輩
行ヲ行フ場合特ニ無力ナル俘虜、一般入寇留者
及ビ船上ニ於テ潜水艦ノ爲ニ撃破セラレタ艦船
ノ生存者ニ對シテ行フ場合ニ採用シタル型ト同ジ
モノデアツタ事ヲ示ス爲ニ當檢察團ハ證據ヲ提
出スルデアリマセウ。被告達ガ又「ヒットラー」
並ニ彼ノ仲間カラ二隻ノ潜水艦及ビ水雷ニ依ッ
テ撃破セラレタ艦船ノ生存者ニ對スル機銃掃射並
ビニ其ノ他ノ方法ニ依ル虐殺ニ關スル獨逸人ノ
經驗ニ基ク計畫ノ贈物ヲ受ケタ事ヲ明カニスル
デアリマセウ。前述ノ出來事及ビ事件ハ之ヲ證
據ニ依ッテ適切且ツ充分ニ展開サレタナラバ獲
得領地ノ鞏固化及ビ爾後ノ侵略準備ノ爲メ已テ
得ザル停滯以前ハ連綿的ニ滿洲、内蒙古ト北支
ノ諸省、支那本部、佛領印度支那、「シヤム」
「ビルマ」、海峽植民地、太平、印度南洋並ニ其
中ニ存シ又隣接スル凡テノ國家及ビ島嶼ノ統治
權及ビ支配權ヲ獲得シ遊ニハ世界ヲ制覇セント
ノ擴大シ行ク目的ノ爲メニ一個又ハ數個ノ侵
略戰爭及國際法、條約、協定、並ニ保障條約
ノ一個又ハ數個ノ戰爭ヲ遂行セントスル機微的
共同謀議ノ存在ヲ明カニ立證スルモノデアルコ
トヲ證シテ申上ゲル次第デアリマス。

提出ヲ申出デテ證據ガ共同謀議ノ事實ヲ確
立スルト言フ結論ヲ裁判所ガ得タナラバ殘ル唯
一ノ論争點ハ「誰ガ當事者デアルカ」ト云フ事デ
ス。本勢頭陳述テ各被告ガ公私ノ資格ニ於テ共
同計畫又ハ共同謀議ノ結成及ビ實行ニ於テ指導
者、組織者、煽動者又ハ共謀者トシテ關與シタ
證據ヲ述ベル爲ニハ本訴訟事件ノ全證據ニ付テ
詳細ナル陳述ヲ必要トシマセウ。斯クノ如キハ
斯ノ準備的勢頭陳述ノ目的以外ノ仕事デアリマ
ス。從ツテ只今我々ハ共同謀議ノ事實ニ關スル
舉證並ニ起訴狀交付ノ各種附錄ニ依リ證明セラ
ル項及ビ事件ガ提出申請中ノ證據ニ依リ證明セラ
ル、ナラバ是等被告ハ他ノ者ト共ニ共同計畫
及ビ共同謀議ニ關與シタルコト及ビ起訴セラレ
タル共同謀議ノ結成並ニ實行ノ責任アル重要指
導者デアツタコトヲ確證スルデセウト云フコト

ヲ申立テ止メマセウ。
被告ノ各々ガ或ハ直接ニ或ハ責任アル軍人又
ハ政府ノ官吏トシテ或ハ共通ノ計畫又ハ共同謀
議ノ組成又ハ實行ニ於ケル指導者、組織者、教
唆者又ハ共犯者トシテ殆ンド總ベテノ一般ニ認
メラレタル、戰爭ノ法規慣例又ハ所謂「戰爭法
規」即チ條約第五條(ロ)ノ「通常ノ戰爭犯罪」
トシテ罪ナル罪アルコトヲ證明スル爲メニ證據
ヲ提出スルデアリマセウ。
滿洲、支那、比律賓、蘭領東印度、佛印、緬
甸、「アム」、ウエニタ」及ビ日本ガ占領セシ其
ノ他ノ數領ノ軍事の占領中、被告人ノ幾人カガ
是等法ノ原則ノ遵守ヲ確保スベキ彼等ノ責任ヲ
負ヒ且ツ廣範圍ニ互リテ無視セシ事實ヲ證據
ハ示スデアリマセウ。斯ノ證據ハ既ニ世界ニ知
レ渡リタル殘虐行爲ニ關スル事實ヲ含ミマス、即
チ福泰鐵道ノ建設及ビ其ノ運営ニ使役サレシ俘
虜ノ大量殺害、比律賓ニ於ケル「バタアン」ノ死
ノ行軍、二千ノ兵隊ノ中生者僅々六人ト言フ
「ボルネオ」ニ於ケル「サンダカン」ラナイノ行
軍、「スマトラ」沖ノ「パンカ」ニ於ケル滿洲軍
看護婦ノ虐殺及ビ「二一九」ノ機銃士ノ處刑等
ガソレデアリマス。尙ホ此ノ證據中ニソレ程良
ク知ラレザル而モ同様ニ劣等ナ他ノ犯罪ノ證據
ヲ含ンデ居リマス。即チ「ボルネオ」ノ「パリス
クバパン」ニ於テ一九四二年(昭和十七年)一月
油田ヲ無罪ノ強引渡ス事ヲ拒絶シタノテ全白人
住民ガ殺害セラレマシタ。佛領印度支那ノ「ラ
ンソン」ニ於テハ四百五十人ノ俘虜ガ先ヅ機關
銃ヲ以テ胸部ヲ射タレ、然ル後銃剣又ハ鎗頭ヲ
以テ處刑サレマシタ。

「リババ」ニ於テハ其ノ四萬五千人ノ
居住民中千八百名ノ市民ガ千九百四十五年(昭
和二十年)二月處刑サレ、數ヶ村ノ全男子住民
ハ剝奪サレマシタ。又中華人民國ノ河北省ノ四百
以上ノ村サレ(シアン、クオ、チュアン)村ニ於
テハ一九四三年(昭和十八年)ノ春僅カニ一軒ノ
家ト二十人ノ住民ヲ除イテ全村ガ破壊サレマシ
タ。尙滿洲軍事省內ニ於テハ一九四二年(昭和
十七年)二月三千ノ中國一般ハ軍防陣地ノ
構築ニ苦力トシテ働カサレ、其ノ
秘密ヲ保持スル爲ニ殺サレマシタ。
俘虜虐待ガ日本内地ニ於テスル、否東京都内
ニ於テスル行ハ日本内地ニ提出シマセウ。是
ハ其ノ權限內ニアラザル強手手段ヲ採ルベキ義務ヲ
被告中ノ若干ノ者ガ故意且ツ無謀ニモ、無視シタ
コトヲ示スモノデアリマス。
又其ノ抗戰ニモ拘ラズ滿載セラレタ無標識ノ
日本ノ俘虜輸送船ニ乘セテ實戰海域ニ連レテ行
ツテ俘虜ヲ葬リ去ツタ證據モアリマス。標識ヲ
附シタ病院船ニ對シテ不法ノ攻撃ヲ加ヘ其ノ結果
トシテ、單ニ負傷陸海兵ノミナラズ其ノ看護ニ
當ツテ居タ軍醫ヤ看護婦迄モ死ニ至ラシメタト
云フ證據モ亦示サレ、デアリマセウ。
日本ノ占領シタ太平洋及ビ印度洋ノ各地域ニ
ハ俘虜虐待ノ見本、並ニ被告中ノ或者ガ計畫シ、
開始シ或ハ遂行シタ戰爭法規ノ侵犯ヲ伴フ政
策ヲ證據立テル戰爭法規ノ他ノ侵犯ノ見本ガア
ツタコトヲ示ス爲ニ同證據ナ併シ左程知ラレテ
居ナイ慘虐行爲ノ證據ヲ提出シマセウ。此ノ充
分計畫サレタ企圖ノ他ノ實例トシテ、現ニ斯カ
ル實例ハ是等ノ慘虐行爲ガ單ニ偶然ノ或ハ單獨
ノ個人的非行ニ非ズシテ、此ノ國策ニ依リ計畫
の結果デアルコトヲ證據立テルコトニ役立ツモ
ノデスガ、我々ハ更ニ南京、漢口及ビ「マニラ」
ニ於ケルガ如キ一般ノ對スル虐殺、虐待ノ見
本、眞珠灣、香港及ビ「コタバル」ニ於ケルガ如キ
一般人及ビ軍人軍屬ニ對スル不法攻撃ト虐殺ト
ノ見本、並ニ外ノ餘リ知ラレテ居ナイ事件トヲ
示シマセウ。
「バラワン」ニ於ケル火災ニ依リ殺害、英
船「ベハ」號ヨリ拉致サレタ俘虜ノ場合ノ如キ
刺殺、又「リババ」艦「ジャン、ニコレ」號ノ場
合ノ如キ溺殺若クハ或ル未知ノ方法ニ依リ處分
等、俘虜ニ對シテ行ハレタ日本軍ノ虐待ノ狀況
ヲ示ス爲ニ證據ガ提出サレタ日本軍ノ虐待ノ方
法、例ヘバ「水療法」、「感電治療」、逆風、爪
引刺及ビ身體ノ毆打ノ如キモノガ、俘虜並ニ地
方民ヲ拷問スル爲ニ日本占領地域ヲ通ジテ、斷
エズ用ヒラレタト云フ證據ニ依ッテ、此ノ確立

シタ方策ガ更ニ立證サレデセウ。更ニ我々ハ、
被告國ガ利益代表團ヲ通ジ、戰爭法規ノ由々シ
キ侵犯ノ例ニ依ッテ被告ノ若干ヲ含ム日本官吏
ノ注意ヲ再三喚起シタ事ヲモ示シマセウ。被告
ノ或者ガ戰爭法規及慣習ニ違反シテ殺シタ直接
命令、即チ戰爭努力ニ直接關聯セル編制泰國間
ノ鐵道作業ニ俘虜ヲ使用スル命令ノ如キモノ、
證據ガ提出サレデセウ。
次ニ被告中ノ或ル者ガ比律賓、中國及ビ其ノ
他ノ地ニ於テ傀儡政府ヲ樹立スル事ニ依リ、又
一時的ニ軍事占領セル諸國ノ主權ヲ其ノ他ノ方
法ヲ侵犯スル事ニ依リ、更ニ是等諸國例ハ比
律賓、蘭領東印度ニ於ケル住民ノ私的並ニ政治
的權利ヲ剝奪スル事ニ依リ戰爭法規ヲ直接侵犯
シタルコトヲ示ス爲ニ證據ガ提出サレデセ
ウ。次ニ被告中ノ或者ガ戰爭ノ法規慣習ヲ侵犯
シテ極東ノ國家及ビ國民ヲ大日本ノ中ニ同化セ
シメント共同謀議シタコトヲ示ス爲ニ別ノ證據
ガ提示サレデセウ。
條例第五條(イ)「平和ニ對スル罪」ト第五條(ロ)
「通例ノ戰爭犯罪」ニ基キ提出サレベキ證據ハ只
今略述サレタトコロデアリマス。
殘ル問題ハ特ニ第五條(ハ)「人道ニ對スル罪」ニ
關聯シテ提出サレベキ證據ニ付キ簡單ニ論述ス
ル事デアリマス。
是等ノ提訴國及ビ國民ハ被告ト其ノ部下及ビ
共犯人ガ犯罪の暴行、不法ナル交戦並ニ傀儡政
府ノ樹立其ノ他ノ同巧異曲ノ手段ニ依リ無法ナ
ル主權ノ擄取ニ依リ被征服國ノ征服及ビ占領ヲ
行ツタコトヲ示ス爲ニ證據ヲ提出シマス。共同
謀議ノ目的ノ實現、即チ武力ニ依リ東亞、太平
洋及ビ印度洋地域ニ於ケル隣接ノ諸國民並ニ諸
國家ノ領土、食糧、油、艦船、工場、其ノ他ノ
財物ノ擄取ガナサレタ事ガ示サレラザアリマセ
ウ。
被告並ニ其ノ共犯者ノ指揮、支配下ニアリ日
本軍ニ依リ征服既成セラレタ不幸ナル國家及
ビ國民ハ國際法下ニ於ケル彼等ノ權利通りノ取
扱ヒヲ受ケナカッタデアリマス。反對ニ是等
ノ國民及ビ國家並ニ財產ハ不法ナル侵略戰爭ノ

戰利品及被擄物トシテ取扱ハレマシタ。此ノ點ニ於テモ亦日本ノ指導者ニ依ツテ採用セラレタ型ハ獨、伊ニ於ケル共謀者仲間ニ依ツテ案出セラレ採用セラレタノト同ジモノデアリマシタ。

被告等ハ、其ノ官職、又ハ責任アル地位ニ於テ、日本陸海軍並ニ日本政府ノ諸部局、諸機關ニ對シ、是等軍隊並ニ政府諸機關ニ多數ノ人々ガ是等違法行為ノ標準ノ又ハ日常ノ事務行為トシテ行フニ至ラシムル様ニ其ノ權力ヲ行使シタコトヲ立證スル爲ニ充分ノ證據ヲ提出サレレデアリマセウ。更ニ此ノ起訴ニ參加セル諸國家ニ依リ、是等ノ被告並ニ其ノ部下ニ對シテ發セラレタ抗議、抗辯乃至戰犯者トシテ當然愛クベキ起訴ノ威嚇ノ通告ニ對シテハ、回答ガナカッタリ、回避サレタリシトデアリマセウ。要スルニ被告及ビ其ノ部下ニ依リ總ジテ無視サレタコト云フコトガ示サレレデアリマセウ。裁判所デハ此ノ勢頭陳述ニ於テ冗長ニシテ間々反復トサヘ思ハレテ起訴狀ノ詳細其ノ他ノ細目ヲ引説スルノ必要ヲ御諒承ニナツタ事ト思ヒマス。

我々ノ見ル所ニ依レバ個人ガ國家ノ首腦者トシテ公ノ資格ニ於テ犯シタ不法行為ニ付イテ、歴史上始メテ個人トシテ罪ヲ問ハレレ爲ニ、本法廷ニ召喚サレテ居ルト云フ事實ノ故ニ其ノ必要ガアツタノデアリマス。我々ハ是等ノ裁判ハ其ノ意味ニ於テ先例ノナイモノデアル事ヲ率直ニ認メマス。而シテ我々ハ先例ナクシテ進ンテ行ク危險ヲ痛感シテ居リマス。何故カト申シマスト結晶シテ先例トナツタ傳統ハ常ニ安全ナ道案内者デアラカラデアリマス。併シナガラ若シ我々ガ先例ヲ持チ且ツ先例ガ無イト云フ理由デ我々ヲ自總自綱シテ居ルナラバ重大ナル結果ガ何等ヲ正當視スベキ理由モ事情モナクシテ續イテ起リ得ルコトヲ認識スルコトガ肝要デアリマス。ソレ故今日我々ハ或ル意味ニ於テハ文明ノ存在其ノモノニ關スル戰シイ現實ニ直面シテ居ルト云フ事ガ悟ラレラバ我々ノ所見ハヨリ善ク理解サレルト信ズルノデアリマス。ソレハ偉大ナル米國ノ指導者ガ嘗テ言ツタ通り「我

我が直面シテ居ルノハ現實ノ事情デアツテ理論デハアリマセン。最近ノ科學ノ發達ニ依ツテ充分ニ證明サレテ居ルヤウニ次ノ戰爭ハ必然ニ文明ノ破壞ヲ意味スル事ハ最早理論デナク事實デアリマス。我々ハ我々ノ義務ヲ自覺シテ居リマス。正義ヲ伴ハザル文明ハ背理トナリマセウ。此ノ訴訟ヲ觀察シ注目シテ居ル人々ニ對シ我々ハ毀譽褒貶ヲ顧ミズ訴訟ヲ進メテ行クト云フ事ダケヲ申上ゲテ置キマス。我々ハ唯一ツノ義務ヲ持ツテ居リマス。其ノ義務トハ我々ノ訴訟手續ヲ正義自體ノ命令ニ完全ニ従ハジメル事デアリマス。是ハ眞ノ挑戰デアリマス。我々ハ先ノ陳述ニ於テ人間存在ノ要求ハ既ニ種々ナク條約、協約及ビ保障ノ宣言中ニ不完全ナガラ結晶サレテ居ルノデアラカラ被告等ノ行為ハ此ノ要求ニ對スル明確且ツ歴然タル侵犯デアル事ヲ表明セント試ミタノデアリマス。其ノ昔支那ヘノ道ヲ發見スル爲ニ「ヨロツバ」船出シ、力ノ偉大ナル航海者ノ船旅ノ際ニ期待シ得、以上ノ完全無ヲ缺此ノ訴訟手續ニ於テ期待出來、イノデアリマス。若シヨリ眞直ナ道順ニ依リ或ハヨリ正確ニ航海術ヲ用ヒタトスレバ幾週間ヲモ節約出來タデアラウト云フ事ハ歴史上ノ問題デアリマス。當時「インスピレーション」ト本能ガ海圖ノナイ海ヲ渡ツテ進ンデ行ク必要ヲ命ジタノデアリマシタ。ソシテ或ル程度我々ハ之ト同ジ「ハン

デイキヤップ」ヲ負ツテ居マス、併シ此ノ企圖ニ乘リ出ス事ヲ要求シテ居ル必要性ハ大ニ異ツテ居タノデアリマス。今日我々ハ世界平和ヲ廣ク健全ニシテ合理的ナ如何ナル措置ヲモ回避シテハナラヌ事ヲ理解シナケレバナリマセン。破壞方法ノ發達ハ世界ガ法律上ノ此細事ノ討論ニ係ツテハ居ラナイ程ノ段階ニ到ツテ居リマス。此ノヤウナ末端の些細ガ討論サレ展開サレテ居ル間ニ、世界自體ガ滅亡シテシマウカモ知レナイト云フ事ハ分リ切ツタ道理デアリマス。自己保存ガ自然界ノ第一法則デアルト云フコトガ一般ニ認メラレテ居ル最重要ナル原理デアルト我々ハ思ヒマス。ソレ故ニ起訴國タル十一ヶ國ハ該法則ヲ支持スル爲ニ其ノ役割ヲ果ス

ヤウニ要請サレテ居マス、吾人ハ防止力ニハ限界ガアルト云フコトヲ承知シテ居リマス。當裁判所ニ於ケル審理ノ結果ト法律上ノ結論ノ如何ニ拘ラズ被告席ニアル是等二十六人ト同種類ノ他ノ人々ガ狂氣ト異常ナル熱トヲ以テ全世界ノ破壞ヲ廣ラスニ至ルガ如キ計畫ト努力トヲ仕組ミ之ヲ持出シ更ニ之ヲ實行ニ移サントスルコトサヘ將來大ニアリ得ルコトデアリマセウ。是コソ狂氣ノ沙汰デアリマス。我々ハ正氣ト論理トニ基イテ行動セントスルモノデアリマス。ソレ故ニ現實のニ此ノ問題ヲ處理セントスル我々ノ努力ニ對シ全世界ノ支援ヲ要請スルモノデアリマス。

侵略戰爭ノ計畫、準備開始又ハ遂行ガ犯罪ナル事ヲ權威ヲ以テ主張シ且ツ進ンデ人類上ニ斯ル破壞ヲ廣ス者ハ有リ觸レタ普通ノ重罪犯人タルヲトテ法律のニ確定シテモ我々ノ念ズル阻止力ハ到底望ミ得ナイコトヲ思フノデアリマス。併シ我々ハ大ナル敬意ヲ以テ裁判所ニ對シ以下ノ點ヲ指摘セントスルモノデアリマス。即チ斯クノ如キ判決コソ是等ノ被告人又ハ其ノ手本トナリタル者及ビ其ノ後續者ノ如キ人物ガ其ノ屬スル社會ニ於テ權力アル位置又ハ權勢アル地位ヲ占ムル事ヲ能ク防止シ得ベシト云フ點デアリマス。

此ノ事ハ實ニ重大ナル事ナノデアリマス。本論告ニ於テ我々ハ或ル稀有ノ場合ノ外ハ是等被告ノ各自又ハ何レノ者ニ對シテモ強ク言及スル事ヲ差控ヘタ事ガ御分リデセウ。我々ガ斯クナセルハ本裁判手續ガ負フベキ威嚇ヲ考慮シタカラデアリマス。我々ハ何レノ個人ニ對シ得又其ノ所謂ニ對シ特別ノ興味ヲ持ツモノデアリマセン。

被告等ハ齒牙ニ依ル支配ヘノ改宗者デアツタガ故ニ訴追サレテ居ルノデアリマス。我々ハ彼等ノ個人ノ觀念國家的野心達成ヲ理想トスル正當性ノ主張及ビ愛國的努力ノ主張ニ係ツテハ居ラレナイノデアリマス。被告等ガ彼等ノ同胞ノ上ニ何ヲ齎ラシタカヲ見ント欲スルヲラバ我々ハ單ニ此ノ建物ノ階上

ニ數歩ヲ運ベバ足リルノデアリマス。人ガ記述ニ依リ爲シ得ルヨリ事實ハ更ニ難辯ニ語ツテ居リマス。被告ハ其ノ辯護人ヲ通ジ彼等ガ占メテ居タ官職ノ故ニ處罰ヲ免レルモノト主張シ且ツ今尙ホ主張シテ居ルヤウニ思ハレマス。即チ彼等ガ勿論當時充分ニ承知シテ居タヤウニ夥シイ人命ノ損失ヲ豫見シ得タ侵略戰爭ノ意識の且ツ計畫のニ決行シタノデスガ、此ノ世界ノ破壞計畫ヲ遂行者、計畫者並ニ設計者デアアル。彼等ガ遂ニ追詰メラレタ時ニ單ニ其ノ占メテ居タ官職ノ故ヲ以テ自由ノ身デアアルベシトナス一方彼等ノ意圖ニナル彼等ノ社會デノ身分低キ人々ガ其ノ生命ト財產ヲ喪失シタノハ合法的デアリ當然デアルト被告ハ今主張シテ居ルノデアリマス。而モ是ハ全ク排撃スベキ理論デアリマス。本裁判所條例モ此ノ見解ハ支持スベカラザルモノトナシテ居リ又人類ノ經驗セル道徳論理ノ總テガ之ヲ排撃スルモノト我々ハ申上ゲマス。日本ノ都市ノ大部分ガ既ニ崩壞シ、ゲリラ戰及ビ住居ノ完全ナル破壞以外ニハ見込ナイ最後ノ場面ニ臨ンデモ被告ノ多クノ者ハ降伏以前ニ更ニ多クノ人命ヲ賭スベキデアルト云フ見解ヲ尙ホモ固執シテ居タト云フ事ヲ本件ニ於テ證據ニ依ツテ示スデアリマセウ。

被告ノ同僚ノ一人ハ眞珠灣ニ於テ亞米利加合衆國ニ對スル攻撃ヲ決行スル遙カ以前ニ米國ノ一士官ニ「我々ハ一千萬人ノ日本人ノ生命ヲ犠牲トスルヲ辭セナイノデス。貴國ハ何人ノ生命ヲ投ズル考デスカ」ト言ツタト云フ事デアリマス。是ガ彼等ノ哲學デアリマス。人間ノ生命ヲ全然無價値ト考ヘテ居ルノデアリマス。此ノ起訴ノ趣旨ハ一個ノ生命モ最モ大切ナモノデアリ是ガ保護ノ爲メニハ當然凡ユル合理的努力ガナサレネバナイト云フ事デアリマス。苟モ個人ノ生命ハ神聖ナルモノデアリマシテ之ヲ非道徳的ノ目的ノ爲ニ合法的ノ犠牲ニサレ得ルモノデハ斷ジテアリマセン。

實際行動ニ顯現サレタ時被告等ノ哲學ガ果シテ何ヲ意味シタカヲ示ス爲ニ我々ハ日本大本營

部ニ依リ編輯サレタ事ヲ提示スルデアリ
マセウ。即チ

中華民國ニ於ケル日本陸軍作戦ノ綜合結果

千九百三十七年即チ昭和十二年七月ヨリ千

九百四十一年即チ昭和十六年六月ニ至ル間

(大本營陸軍報道部報告)

一 中國軍死者概數 二、〇一五、〇〇〇名

戰死傷者併其ノ他

含ム中國軍損失 三、八〇〇、〇〇〇名

南 獲 品

武 器

戰車自動車貨物自動車 一、四七五輛

列車、機關車、貨車 二、四四九輛

軍艦及ビ船舶 四一〇隻

「ノモンハン」ヲ含ム空軍活動ノ戰果

擊墜敵機 一、七七四機

地上擊破 二、三三三機

敵ノ全損失 一、七七七機

「ノモンハン」事件」ヲ含ム皇軍損失

戰 死 一〇九、二五〇名

喪失軍用機 二、三〇〇機

日華敵對行為年代表

千九百三十七年即チ昭和十二年七月ヨリ千

九百四十一年即チ昭和十六年五月ニ至ル間

千九百三十七年即チ昭和十二年

七月 七日 北支事變濶濶ニ勃發。

七月 十五日 日本政府北支出兵ヲ決定。

七月 二十五日 敵對行為開始ニ於テ始ム。

七月 二十八日 香月司令官ハ中華民國當局ニ

對シ自由行動ヲ取ル旨ノ日本

陸軍ノ決定ヲ通告ス。

七月 二十九日 日本軍ハ中華民國第二十九軍

ニ對スル作戦ヲ開始ス。

八月 八日 日本軍北京ニ入城。揚子江沿

岸ノ諸都市ニ於ケル日本居住

民引揚ヲ完了。

八月 九日 大山事件上海ニ於テ勃發。

八月 十三日 敵對行為上海ニ於テ開始ス。

八月 十四日 長谷川帝國海軍第三艦隊司令

官ハ支那軍ヲ攻撃スル帝國海

軍ノ意圖ヲ宣言ス。

帝國海軍空軍ハ、日本ヨリ支

那海ヲ橫斷シテ、中支ニ於ケ

ル支那ノ軍事的據點ニ對スル
最初ノ攻撃ヲ行フ。
九月 五日 中國ノ全沿岸ハ帝國海軍ニ依
リ封鎖サル。
九月 八日 帝國陸軍内蒙古ニ入ル。
十二月 七日 日本軍ノ南京總攻撃開始。
十二月 十三日 南京陥落。
千九百三十八年即チ昭和十三年
五月 二十八日 帝國海軍空軍ハ廣東ニ對スル
攻撃ヲ開始シ、數週間反覆サ
ル。
十月 二十一日 廣東占領。
簡潔ヲ期スル爲メ全部ノ具陳ハ略シマスガ此
ノ報告ハ大本營陸軍部當局ガ作製シタモノデア
リ千九百三十七年ヨリ千九百四十一年即チ昭和
十二年ヨリ昭和十六年ニ及ブ血ナマクサキ中國
侵略ノ各段階ノ概要ヲ述ベテ居ルモノデアリト
云フ事ヲ想起サレルヤウホ法廷ニ對シ謹シク要
請スルモノデアリマス。併シ斯カル具陳ニモ拘
ラズ被告等ハ是等ガ侵略戰ヲハ愚カ第一ニ戰争
デハナイト抗辯シ又「事件」ナル用語ヲ用ヒ
テソレ等ヲ戰争ノ範疇カラ削除シテシマッタノ
デアリマス。換言スレバ二百一萬五千ト概算サ
レル中華民國人ヲ殺害シ並ニ三百八十萬ト概算
サレル死傷者及ビ捕虜ヲ出シナガラ戰争デハナ
イト主張シテ居タノデアリマス。次ノ項目ガ
「南獲品」トナツテ居リ此ノ點極メテ興味深イノ
デアリマス。茲ニ本當ノ真相ガ現レテ居リマ
ス。

此ノ大量殺害行為、全部具陳スルニハ本裁判
所及ビ訴訟手續ガ許ス以上ノ時間ヲ必要トスル
デセウ。併シナガラ我々ガ本起訴ニ當ツテ強調
セントシタ如ク假令一個ノ生命ト雖モ法ノ容認
ナクシテ故意ニ奪ツタラバソレハ殺人罪ヲ構
成スルト主張スルモノデアリマス。ソレ故是等
ノ邪惡ナ狂信ノ惡意アル指導者達ガ公職ヲ持
ンデ大規模ナル殺人ヲ齎シタト云フ事ハ如何ナル
辯護モ成立シ得マセン。若シ斯ル原則ノ存在ヲ
容認スルナラバ法ノ施行トハ實體ヲ缺イテ單ニ
其ノ影ノミヲ施行スル事ヲ意味スルデアリマセ
ウ。
「ボツダム」宣言ニ於テ述ベラレタ如ク日本國
民ヲ奴隸化シ又日本國國家トシテ滅ボサレト
スルガ如キ意圖ハ過去ニ於テモナカッタシ又現
在ニ於テモナイノデアリマス。我々ハ日本國民
自身ガ全ク是等被告ノ權力及ビ威力下ニアリ、
而シテ其ノ限リニ於テ彼等ノ犠牲者デアッタト
云フ結論ニ達セザルヲ得ナイノデアリマス。本
裁判所ノ許可ヲ得テ我々ハ降伏條件ニ基キ其ノ
適當ナリト認メタル方法ニ依リ其ノ條件ヲ實施
スルニ充分ナル權利ヲ有スル占領軍ガ日本國民
及ビ世界ニ對シ其ノ占領遂行ノ公正ナル態度ヲ
顯露スルニ充分ナル機會ヲ與ヘテ居ルト云フ事
ヲ指摘シタイノデアリマス。

「ボツダム」宣言ハ「カイロ」宣言ニ於ケルト同
様戰犯者ニ對シテ嚴酷ナル處罰ガ科セラルベ
キデアル事ヲ述ベテ居マス。而シテ結局本件ニ
於テ我々ハ斯ル戰犯者トハ何ナリヤトノ問
題ニ到達スルノデアリマス。戰犯者トハ彼
等ノ上官代理者ヤ上級將官ノ命令ニ服従シタ兵
士ニデアリ得ルデアリマセウカ、ソレトモ正
義ト實際上カラシテ眞ニ事件ニ對シ責任アル指
導者達ヲ意味シナケレバナラナイデアリマセ
ウカ。被告席ニ居ル被告ハ決シテ後悔ヲ感ジテ
居ル懺悔者デハナイノデアリマス。若シ本裁判
所ニ於テ既ニ述ベラレタ彼等ノ主張ヲ我々ガ信ジ
ルトスルナラバ、彼等ハ惡イ事ヲシタト云フ事
ヲ何等認メナイシ、若シ釋放サレルナラバ再三
再四侵略ヲ繰り返シデアラウト云フ事ヲ暗ニ言
ツテ居ルノデス。其ノ全ク安全保護ノ必要上
カラシテ彼等ハ永久ニ拘束サレルベキデアリマ
ス。
今度ハ我々ガ順番ニ被告ニ關シ、細目ハ措
キ、一言一般原則ヲ述ベルコトガ必要トナツテ
來マス。檢察團ノ他ノ種々ノ任務ノ中デ本起訴
狀ニ依リ適當ニ起訴サレ得タカモ知レタ幾多ノ
人々ノ中カラ我々ガ使用シ得ル證據ニ徴シ、條
例ニ規定サレタ犯罪ニ對シテ最大ノ責任ヲ有ス
ルト思ハレル人々ヲ選擇スルト云フ特ニ重イ責
任ヲ帯ビテ居タノデシタ。
本訴訟手續ヲ仕方ガナイ程取扱ヒ惡クサセナ
イ爲ニ、今本裁判所ニ居ル起訴狀記載ノ被告ノ
數ヲ制限スルコトガ必要デシタ。日本ノ戰犯
罪人ニ對スル裁判ハ是ダケデハ濟マナイデセ
ウ。既ニ死ンデシマッタ人々或ハ裁判ニ出頭
シ得ナイ健康状態ニアル人々ガ責任ノ重要ナ部
分ヲ負ツテ居タコトハ明白デス。若シ我々ガ今
全部ノ事實ヲ知ツテ居ルナラバ、今裁判サレテ
キナイ人々デ被告ヨリ先ニ起訴サレタカモ知レ
ナイ人々ガキルトイフガ如キモ有リ得ベキ事デ
セウ。勿論此ノ事ハ是等被告ノ誰ニ對スル辯護
ニモ、又本訴訟手續ニ於テ、關聯ア 審理題目ニ
モナラナイノデアリマス。是等被告ノ個々ノ場
合ニ於ケル唯一ノ問題ハ個人トシテノ被告ニ對
スル訴訟事實ガ立證サレルカドウカトイフ事デ
アリマス。
是等被告ノ各々ガ此ノ起訴狀ニ主張サレル進
展ノ共同謀議ノ當事者デアッタコト、及ビ主張
セル他ノ不法行為ヲ爲ス爲メ共働シテ居タコト
ヲ我々ハ起訴シテ居ルノデアリマスガ、獨逸
ノ共同謀議者ノ場合ニ於ケルガ如ク、彼等ハオ
互ニ意見ノ一致シテキタ結合サレタ徒黨デア
タコトハ證據ハ示サナイデアリマセウ。反對ニ
是等ノ起訴事實ニ關聯アル及ビ關係ガナイと思
ハレル問題ニ付テ、彼等ノ間ニ意見ノ相違ト激
シイ抗爭トガ存シテ居タ様ニ思ハレルイデアリ
マス。
侵略戰ヲ又ハ侵略戰争ノ脅迫ニ依ツタ、日本
ノ勢力ヲ凡ユル可能ナル方面ニ擴張サセヤウト
ノ決意ニ於テハ、彼等ノ總テガ一致シテ居タ
云フ事ガ證據ニ依ツテ明ラカニサレルト信ジマ
ス。
彼等ハ或ル特定ノ國ニ對スル侵略行為ヲ如何
ナル程度迄押シ進メル事ガ可能デアリ又ハ得策
デアラカト云フコト、並ニ何レノ國ノ最初ニ攻
撃スルノガ賢明デアラカト云フコトニ付テ屢々
意見ヲ異ニシタノデアリマス。

或者ハ彼等ノ毒液ヲ主トシテ中國ニ向ケ、或
者ハ「ソビエツト」社會主義共和國聯邦ニ向ケ、
或者ハ全英聯邦ニ向ケ、或者ハ亞米利加合衆國
ニ向ケ注ギマシタ。尙ホ或者ハ「ヒットラー」ノ

例ニ倣ヒ最初ニ比較的弱キ國々ヲ攻撃スル
カ、又ハ既ニ歐洲戰爭ノ渦中ニアル爲メ反抗能力
ヲ支障ガアラウト思ハレル如キ國々ヲ攻撃スル
云フ卑劣ナ併シ慎重ナル方針ヲ唱道致シマ
シタ。或者ハ、彼等ハ結局優勢トナツタノデア
ルガ、大膽且ツ攻撃的デアツテ、平和ヲ愛好ス
ル世界ノ大部分ヲ同時ニ相手トシテ戰フ心構ヘ
ガ出來テキマシタ。他ノ人々ハ道德的遠慮カラ
デハナク日本ノ敗北ヲ豫想シテ、少クモ暫ク
ハ或ル國々、特ニ亞米利加合衆國ニ對スル戰爭
ニ反對致シマシタ。彼等ハ全部彼等ガ大量ナル
條約違反ヲ爲シツツアルコトヲ勿論承認シテ居
タノデアリマス。又或ル者等ハ「恐ラクハ被告
中ニモ居ルデセウガ」彼等ノ企圖ニ關シ其ノ邪
惡性ニ對スル道德的覺悟ト其ノ結果ニ對スル恐
怖感ト有シテ居リマシタ。併シ彼等ハ此ノ企
圖ヲ實行シタノデアリマス。我々ハ彼等ノ何レ
モガ同様ニ有罪ナリト思惟シマス。而モ道德的
見地ヨリ云ヘバ遠慮シナガラ、假ニ遠慮シタリ
トシテ而モ尙ホ犯罪ニ加ハツタ者ハ、誤レル熱
狂ニ依リ自己ノ行爲ノ邪惡性ニ付テ、幾分盲目
ニナツテ中々者ヨリ更ニモツト責メラルベキダ
ト強調シテ言ヒ得マセウ。

是等被告ノ或者ノ間ニ今一ツノ軌轢ノ原因ガ
アリマシタ。即チ陸軍・海軍・官民間ノ日本ノ
國內權力ニ對スル三ツ巴ノ鬭爭デアリマス。其
ノ各々ハ更ニ其ノ内部ニ於テ諸黨派ト諸反對派
ニ分レテ居リマシタ。不法侵略ノ政策ニ對シテ
加擔シタ人々ガ或ル特定ノ時ニ或ル特定ノ侵略
行爲ニ其ノ主唱者ガ日本政府内デ餘リ有力ニナ
ルノヲ望マナイト云フダケノ理由デ反對シタコ
トヲ示スコトハ、彼等ノ何人ノ爲ニモ辯護ニナ
ラスト思ヒマス。

各被告ニ關聯アル事實ヲ彼ノ行爲ニ關シ出來
得ル限り充分且公平ニ、本裁判所ニ提出スルノ
ガ本檢察團ノ義務デアリマス。併シ

我々ガ之ヲ行フニ當リ我々ハ裁判所ニ以上述べ
マシタ事項ヲ心ニ御留メ置キ下サル事ヲ願フモ
ノデアリマス。

被告人ノ指名ニ關シテ述ベルニ當リ比較的重
要ナラザル者又ハ權力ノ最高地位ニ在リシ者デ
指名漏レニナツテキル者ガ多數アルコトヲ注意
スルコトガ肝要デアリマス。是等ノ取捨選擇方
法ハ擬指キ本檢察團ノ見解ニヨレバ、或一ツノ
場合又ハソレ以上ノ場合ニ於テ、日本政府ニ於
テ憲法上認メラレタル最高ノ地位ヲ占メテキタ
ソレ等ノ者ハ、法律上ノ指導者デアツテモ事實
上ノ指導者デハナカッタノデアリマス。洵ニ是
等ノ個人各自ハ是等ノ被告人及ビ其ノ他ノ者ニ
依リ支配統御セラレテキタノデアリマス。若シ
コノ點ニ關シ被告人若クハソノ辯護人ニ異議ガ
アルナラバ、ソノ眞實ヲ闡明スル充分ノ機會ガ
與ヘラレバデアリマセウ。

本檢察團ノ見解ニヨレバ主要被告人等ハ本件
ニ關スル起訴狀ニ含マレテ居リマシテ、此ノ中
ヨリ除外サレタノハ、マレモ利用シ得ベキ事實ニ
付細心ナル研究ノ結果デアリマシテ、コノ研究
ノ結果ハ起訴狀ニ含マルベカリシ個人ノ或ル者
ハ眞ノ意味ニ於テ日本國民自身ト同程度ニ是
等被告人ノ侵略、權勢、並法律及ビ正義無視ノ犠
牲デアツタト云フ結論ニナリマシタノデアリマ
ス。此ノ意味ニ於テ我々ハ武力、壓迫、暴力ニ
依ツテ無視サレ若クハ回避サレテ來タト信セラ
レル所ノ憲法上ノ規定ソノモノヨリモ寧ロ現實
及事實上ノ情勢ニ敢然トシテ當ルコトヲ企テテ
參リマシタ。

此ノ點ニ於テ我々ハ裁判所ガ一九三六年即チ
昭和十一年所謂「二二六事件」ニ關スル證據ニ
特別ノ御注意ヲ拂ハレンコトヲ御勸メ申上ゲマ
ス。最後ニ申上ゲマスガ、國家自體ハ條約ヲ破ル
モノデナク又公然タル侵略戰爭ヲ行フモノデモ
ナイト云フ事ヲ再三再四強調スル必要ガアリマ
ス。責任ハ當ニ人間ト云フ機關ニ在ル。即チ平
和ヲ維持スル爲ニ斯ル條約及ビ協定ヲ實施スル
爲ナリ又ハ破壞シタリスル爲ナリノ權力ヲ何等

カノ方法ニ依ツテ自衛的ニ求め且ツ獲得シタル
個人ニ在ルノデアリマス。彼等ハ此ノ權力ヲ自
衛的ニ掌握シタノデアルカラ一般普通ノ正義ノ
命ズル所ニ從ツテ彼等自身彼等ノ行爲ニ對シ個
人ノ二處罰ヲ受ケキバナラナイノデアリマス。

我々檢察團ハ是等ノ訴訟ノ重大性ヲ深ク自覺
シテ居ルノデアリマス。我々ハ是等ノ日本人被
告ノミナラズ總テ人ヲ拘束スル嚴然タル法律
ノ原則ニ遵ツテ居ルモ信ズルノデアリマス。
最後ニ適及的效力ノ不當ニ關スル思想ト概念
ヲ要約シテ申上ゲマス。之ニ對シテハ簡單ニ回
答ガ出來ルト思ヒマス。多數ノ國家ノ正義ノ道
程ニ於テ、長イ間確立サレテ居ル斯様ナ健全ナ
法規ハ決シテ覆ヘサレレバキデハアリマセン。
併シ此ノ法律原則ハ單ニ二人ガ其ノ行爲時ニ於
テ犯罪デナカッタ行爲ノ爲メ罰セラレルコトハ
ナイシ又罰セラレベキデハナイト云フ事ヲ意味
スルニ過ギナイノデアリマス。ソレハ人ガ其ノ
遵フベキ法ニ依ツテ犯罪デアルト明カニ認メラ
レタ行爲ノ爲メ罰セラレルベキデナイト云フ事ヲ
意味セシメントシタモノデハ、決シテアリマセ
ン。是等ノ被告ニ對シ提訴サレタ總テノ不法行
爲ハ起訴狀ニ記載セラレタ日時ヲ遡ルコト遠キ
以前ニ於テ既ニ國際法上犯罪トシテ充分認メラ
レテ居タノデアリマス。

重テ我々ハ申シマス。是等被告ノ不法行爲
ノ結果ハ凡ユル犯罪ノ内デ最モ古イ犯罪タル殺
人ヲ構成スル人命ノ不法若クハ不當ナル奪取ト
ナツタノデアリマスシ、我々ガ其ノ科セラレン
コトヲ求メル處罰ハ斯ル不法行爲ニ相應スル處
罰デアリマス。
若シ過去ニ於テ斯ル行爲ガ處罰サレズニ濟マ
サレタ例ガアツタトシテモ又假令傷メツケラレ
打チノメサレタ世界ガ此ノ正義ノ不履行ヲ許シ
タトシテモ我々ノ今日ノ返答ハ最早斯ル怠慢ハ
許サレ得ナイト云フコトデアリマス。
八十年前亞米利加ノ一偉人ハ戰場ニ於テ人民
ノ、人民ノ爲メ、人民ニ依ル、政府ハ地球上ヨ
リ滅亡スベキニ非ズト自國民ニ訴ヘマシタ。今
日檢察團ノ我々ハ本裁判所ニ對シ眞情ヲ吐露ス

ルモノデアリマス。併シナガラ當ニ政府ノミナ
ラズ文明ソレ自體ノ滅亡ヲ避ケルニ或ル程度役
立ツデアラウ原則ヲ確立スル様ナ處理ヲ正義ノ
範圍内ニ於テ是等ノ人々ニ對シ採ルヤウ我々ガ
本裁判所ニ要請スルコトヲ時代ノ進展ハ要求シ
テ居リマス。
我々ハ本法廷ニ對スル最後ノ言葉トシテ東京
灣ニ於ケル降伏手續ノ際ノ聯合國軍最高司令官
ノ言葉ヲ繰リ返シマス。
「世界ノ人々ノ大多數ヲ代表シ不信惡意又ハ
憎惡ノ精神ヲ以テ我々ハ此處ニ會スルニ非ズ。
寧ロ我々ガ將ニ奉仕セントシテ居ル神聖ナル目
的ニ貢獻スル唯一ノモノデアルカノ高次ノ完全
性ニ止揚シ、我々國民ノ總テヲ彼等ガ不正式
ニ採ラントシテ居ル諒解ヘノ忠實ナル遵法ニ全
ク從ハシメルコトガ我々勝者並ニ敗者ノ雙方ノ
ナスベキコトナノデアル。」
我々ハ此ノ聲明ニ嚴格ニ遵據シテ行動シヨウ
ト努力シテ來タ又今後モ此ノ努力ヲ繼續シヨウ
トスルモノデアリマス。(完)

キーナン檢察官劈頭陳述中、
裁判長ノ命ニ依リ檢事側、辯
護人側、及言語部側協議ノ結
果左ノ二項ヲ削除シ、一部ヲ
訂正ス
「若シ夫レガ眞實デナイトスレバ、是等諸條
項ノ施行ハ何等意義無キモノトナル。之レヲ否
定スル所論ハ國際間ノ行爲ガ、其唯一ノ目的ト
スル所、他ヲ誑詐、欺瞞スルニアルトナスニ至
ル迄低下セル事、各國家ガ國際間ノ文書ニ自己
ノ名ヲ記スニ當リ其ノ意圖スル所ノ相互ニ相手
方ヲ欺クニアルト云フ事以外何等ノ意義モナイ
事トナル。併シ斯カル無稽ナ主張ハ既任ニ於テ
幾度カ否定サレタ所デアリ。」

「被告人ノ指名ニ關シテ述ベルニ當リ比較的
重要ナラザル者又ハ權力ノ最高地位ニ在リシ者

デ指名漏レニナツテキル者ガ多數アルコトヲ注意スルコトガ肝要デアリマス。是等ノ取捨選擇方法ハ、扱テ指キ本檢察團ノ見解ニヨレバ、或一ツノ場合又ハソレ以上ノ場合ニ於テ、日本政府ニ於テ憲法上認メラレタル最高ノ地位ヲ占メテキタソレ等ノ者ハ、法律上ノ指導者デアツテモ事實上ノ指導者デハナカッタノデアリマス。若シコノ點ニ關シ被告人若クハソノ辯護人ニ異議ガアルナラバ、ソノ眞實ヲ闡明スル充分ノ機會ガ與ヘラレレバデアリマセウ。

本檢察團ノ見解ニヨレバ主要被告人等ハ本件ニ關スル起訴狀ニ含まレテ居リマシテ、此ノ中ヨリ除外サレタノハ孰レモ利用シ得ベキ事實ニ付細心ナル研究ノ結果デアリマシテ、コノ研究ノ結果ハ起訴狀ニ含まルベカリシ個人ノ或ル者ハ眞ノ意味ニ於テハ日本國民自身ト同程度ニ是等被告人ノ侵略、煽動、竝法律及正義無視ノ犠牲デアマタト云フ結論ニナリマシタノデアリマス。此ノ意味ニ於テ我々ハ武力、壓迫、暴力ニ依ツテ無視サレ若クハ回避サレテ來タト信ゼラレル所ノ憲法上ノ規定ソノモノヨリモ寧ろ現實及事實上ノ情勢ニ敢然トシテ當ルコトヲ企テテ參リマシタ。

此ノ點ニ於テ我々ハ裁判所ガ一九三六年即チ昭和十一年所謂二、二六事件ニ關スル證據ニ特別ノ御注意ヲ拂ハレシコトヲ御勸メ申上ゲマス。

「被殺ナル處罰」ハ「嚴重ナ裁判」ト訂正